

京都・ボストン姉妹都市提携
60周年記念アルバム



還暦 -KANREKI-

KYOTO
BOSTON

—KANREKI—

京都・ボストン姉妹都市提携
60周年記念アルバム

ボストン市概要 P.2

両市の交流の軌跡

- ・交流の記録 P.4
- ・ボストン市との交流のはじまり P.5
- ・両市の寄贈品 P.7
- ・京都市からの寄贈品（京町家の移築から40年） P.8
- ・姉妹都市提携40周年 P.11
- ・姉妹都市提携50周年 P.12
- ・姉妹都市提携55周年 P.14

姉妹都市提携60周年記念事業

- ・姉妹都市提携60周年に当たって P.15
- ・全体スケジュール P.16
- ・60周年記念ロゴマーク発表 P.18
- ・記念事業紹介 P.19
- ・記念事業一覧 P.46

特別インタビュー

- ・畑正高 松栄堂代表取締役社長 P.48
- ・牧野直史 ジェトロ京都貿易情報センター所長 P.50
- ・岸田蘭子 京都市立高倉小学校校長 P.52
- ・森田喜代子 ポストン日本協会理事 P.54
- ・茶山明美 ポストン子ども博物館 P.56
- 日本プログラムマネージャー兼エディター

ボストン市概要

姉妹都市提携

1959年(昭和34年)6月24日

姉妹都市提携の動機と経過

昭和32年(1957年)、市長が駐日アメリカ大使を訪問し、ボストンとの提携希望と協力を要請し、更にサンディエゴ市で開催された第4回日米市長・商工会議所会頭会議に出席する京都市代表团に、ボストン市長宛書簡を託した。昭和34年(1959年)、市長がボストンを訪問し、正式調印した。

ボストン市の概要

マサチューセッツ州の州都で、函館市とほぼ同じ緯度にある港湾都市。ニューイングランド地方最大の都市で、商業・金融・文化の中心地。その歴史は、1630年に始まり、ボストン茶会事件などアメリカ独立運動関係の史跡や文化施設が多数ある。ボストン交響楽団、ボストン美術館、ボストンマラソン、ボストンレッドソックスなど、文化・スポーツで有名。ボストン大学のほか、郊外にハーバード大学、マサチューセッツ工科大学を擁し、学術面でも知られ、ハイテク産業が発達している。

／ボストン市にとって最初の／
姉妹都市が京都市！！／



ボストン市庁舎外観



写真:マサチューセッツ州政府観光局



■ 広域図



■ ボストン市中心部



両市の交流の軌跡

■ 交流の記録

1959年6月

▶ 京都市親善使節団(高山義三市長他)がボストンを訪問、京都・ボストン姉妹都市提携署名

1964年10月

▶ 京都で「姉妹都市児童画交歓展」を開催(以後毎年継続)

1976年1月

▶ ボストン子ども博物館に日用品約100点を寄贈(着物、おもちゃ等)

1978年1月

▶ エドワード・ケネディ米国上院議員が入洛。京都市にボストン市旗を寄贈

1978年3月

▶ ボストン交響楽団(小沢征爾指揮)及びボストン交響楽団友の会一行が京都で公演

1980年4月

▶ ボストン子ども博物館に京の町家を寄贈(1979年移築)

1983年～2002年

▶ 両市の高校生を団員とする青少年使節団を相互派遣

2007年8月

▶ 「国際青少年みらい環境会議2007」を開催し、ボストン市から高校生2名が参加

2008年、2010年～2012年、2014年、2015年

▶ 日米青少年野球交流プログラムに、京都市から中学生野球選手を派遣

2008年11月

▶ 「京都創生海外発信プロジェクト」により、ボストン市で雅楽公演を実施

2009年8月

▶ 日米青少年野球交流プログラムを実施。ボストン市の中学生を受け入れ、ボストン市にて歴史都市の保存・再生をテーマにしたシンポジウム等、様々な50周年記念事業を実施

2010年～

▶ 京都市立堀川高校の生徒がボストン市を毎年訪問

2012年4月

▶ 「春祭り in Boston」(現名称は「ボストン日本祭り」)がボストン市にて開催され、日本文化を紹介

2012年7月～8月

▶ 「姉妹都市青少年みらい環境会議2012」を開催し、ボストン市から高校生2名が参加

2013年9～12月

▶ 米姉妹都市間教員によるオンライン異文化交流

2014年5月

▶ 祇園祭長刀鉦囃子方一行がボストン市を訪問し、各地で演奏を披露

2016年12月

▶ キャロライン・ケネディ駐日アメリカ大使(当時)が入洛。アメリカ留学・文化交流イベントにおいて、京都の学生や留学生約100名を対象に大使による講演会を実施

2017年8月

▶ 京都市友好都市青少年会議「京都もつとえとこサミット」を開催し、ボストン出身の留学生2名が参加

2019年4月

▶ 姉妹都市提携60周年記念事業を実施。京都市代表団がボストン市を訪問

2019年10月

▶ ボストン市代表団が京都市を訪問 等

■ ボストン市との交流の始まり(1959年)



1959年6月 京都市長一行がボストン市に到着



ワシントン・コミッショナーの
オフィスで高山市長の談話を録音

京都市▶▶▶ボストン市



ボストンレッドソックス球団代表より贈物を受ける
高山市長(左)とハインズ市長(中央)



ボストン市役所にて姉妹都市提携に署名の様子
左から千宗室氏、不破治氏、高山夫人、高山市長、ハインズ市長、三輪晃勢氏(当時)

ボストン市▶▶▶京都市



1959年11月
ボストン市公式代表全米都市提携委員長
ボートマン夫妻が京都市役所を訪問



市長室にてボストン市からの
公式文書手交

■両市の寄贈品

姉妹都市提携に係る文書(1959年)

決 議 文

京都市長高山義三氏は日本国京都市と米国ボストン市との間の姉妹都市提携を提案せられ

両市の結びつきを公式にするために、京都市の知名人とともにボストン市を訪問された。

京都市とボストン市とは両国の優れた歴史と文化の中心地であり、また都市提携は国際的な親善と理解とを確立し、助長するための最も重要な手段の一つであるが故に

ボストン市を代表して、市民対市民プログラム(People-to-People Program)に基くボストン・京都提携委員会は、文化的並びに経済的交流を永続的な計画にしようとする市長高山義三氏及び京都市の申出を公式に受諾することを決議するものである。

西暦1959年

ジョン・B・ハインズ

ボストン市長
ボストン・京都提携委員会
名誉委員長

ジョン・D・ブラウン

ボストン・京都提携委員会
委員長



(京都市国際交流会館 蔵)

People-to-People Programとは…

日本とアメリカとの最初の姉妹都市提携は、1955年の長崎県長崎市とミネソタ州セントポール市でした。

その後、両国の姉妹都市交流は、1956年に第34代アイゼンハワー大統領が提唱した草の根のレベルでの交流を通じて市民相互の理解を深めることで世界平和の実現を目指す「People-to-People Program」を契機にして大きく発展していきました。

ボストン市からの寄贈品



ガス灯

●設 置 日 1969年2月

●形 状 鋳物製で全長約3.5m ガス灯部分は1.1m、重さ200kg

●由 来 このガス灯はマサチューセッツ州庁舎(ボストン市ビーコンヒル:歴史的な由來のある通り)の前で永年使用されていたもの。

●設置場所 市役所前広場



鳥を持った少年像

●設 置 日 1982年5月

●形 状 高さ 71.12cm 直径 53.34cm 重量 79.38kg

●由 来 この像は、ボストン出身のバシュカ・パエフ女史(1893~1979)が作った1934年作のブロンズ像。現在、ボストン市のパブリックガーデンの噴水に設置され、市民に親しまれているもので、京都に贈られたのはそれと同じ鋳型で造られたもの。

●設置場所 京都市国際交流会館
(旧設置場所:京都会館中庭)

京都市からの寄贈品



ボストン子ども博物館の外観

Boston Children's Museum

子どもたちが見て触って動かして遊べる遊具が豊富に揃う体験型の博物館。館内には、今から40年前、京都市が寄贈した京町家が展示されており、ジャパニーズハウスとして多くのボストン市民に親しまれている。



エントランスにある大きな牛乳瓶がミュージアムの目印!!

石灯籠

◎寄贈時期 1968年8月

◎設置場所 ボストン市役所内



京町家

◎寄贈時期 1980年4月

◎設置場所 ボストン子ども博物館内



館内にある京町家

■京都市からの寄贈品～京町家の移築から40年～

西陣の京町家は解体後、船便でシアトルへ。その後陸路でボストンへと運ばれ、京都の大工さん達の手によって組み立てられました。



移築に至る当時の様子①(1976年～1979年)

新しくダウンタウン地域に移転するボストン子ども博物館のために、充実したジャパニーズ・ハウスを作ることが京都市代表団から提案されました。

その後、西陣地区の町家を所有する市民の協力により寄贈が決定。京都市民から多額の募金が集まるとともに、日本の生活用品約100点(着物等)が贈呈されました。

出典: Boston Children's Museumウェブサイト



歓談する船橋市長(左)



ひな祭りを楽しむ様子



住山ご一家がかつて所有していた京町家



移築に至る当時の様子②(1979年)

解体した町家を組み立てるため、安井全(やすいもく)工務店から5人の大工さん達がボストンを訪問。現地では、成功を祈願した起工式も行われました。



出典: Boston Children's Museumウェブサイト

■姉妹都市提携40周年(1999年)

京都・ボストン姉妹都市提携40周年を記念して、1999年10月、榎本頼兼市長を団長とする京都市代表团、「京都ボストン交流の会」の会員を中心とする市民交流団がボストン市を訪問。記念行事等を通じて、両市の交流を深めました。

40th
anniversary



パークマンハウス(迎賓館)にてトーマス・メニーノ・ボストン市長(右から1人目)を表敬訪問



ジョイス・ウィリアムズ長官から出迎える榎本市長
(ボストン・ローガン空港)



レセプションにて
(左から姫野京都ボストン交流の会副会長、榎本市長、榊原会長、伊豆蔵副会長、
カサグランデボストン子ども博物館館長、織田交流会顧問)



KBS京都からインタビューを受ける榎本市長



ボストン子ども博物館でのレセプション(折紙の贈呈品を受ける様子)



ボストン子ども博物館での展示の視察(左:帯地による和装小物、右:組み紐)

移築に至る当時の様子③(1980年～)

京の町家贈呈式に京都市代表团が参加。京町家のオープン後、剣道、太鼓、書道などが披露されました。以降、京町家では日本文化に触れられる様々な取組が行われています。



■ 姉妹都市提携50周年（2009年）

50th anniversary

2009年8月、門川大作市長を団長とする京都市代表团がボストン市を訪問。両市長出席のもと、パークマンハウス（迎賓館）において記念式典を開催し、50周年という節目の年を両市民で祝うとともに、今後の更なる交流の発展を誓い合いました。



姉妹都市提携再確認書に署名をする門川市長(左)とメニーノボストン市長(右)



昭和ボストン校を訪問し、サマースクールに参加中の学生と懇談



歴史都市の保存・再生をテーマとした共同シンポジウム



笹岡隆甫氏の生け花パフォーマンス



モード・ジャポニズム ～浮世絵と日本の髪型～



ハーバード大学学長との懇談



2008年 日米青少年野球交流プログラム

フェンウェイ・パークにおいて、ボストン・レッドソックスに所属する岡島秀樹投手からの野球指導や、試合開始前のセレモニーへの出席、大観衆の前での紹介など、貴重な体験を子ども達に提供しました。



2009年 門川京都市長、繁隆夫京都市会議長が始球式に参加し、ボストン市民に姉妹都市である京都市をアピールしました。



2009年 日米青少年野球交流プログラム

ボストンの中学生野球選手を受け入れて、ホームステイ、親善試合、京都市内の視察、交流会等を実施しました。



■姉妹都市提携55周年(2014年)



2014年5月、姉妹都市提携55周年を記念して祇園祭長刀鉦囃子方一行19名がボストンを訪問。ボストン美術館をはじめ、ボストン子ども博物館や在ボストン日本国総領事館、現地の高校などで演奏。ボストン日本協会の年次総会でも演奏して交流を深めました。山鉦巡行の様子を映像で紹介しながらの浴衣姿でのお囃子「コンチキチン」の音色に、ボストン市民からは「素晴らしい行事」と感謝の言葉が寄せられました。

55th
anniversary

■姉妹都市提携60周年に当たって

姉妹都市提携～55周年

京都市とボストン市はともに歴史あるまち、学生のまちとして多くの類似点を持ち、文化・教育など幅広い分野において長年にわたり交流を重ねてきました。

文化面では、ボストンからは小澤征爾氏率いるボストン交響楽団の演奏、ボストン美術館展の開催、また京都からは今から40年前ボストン子ども博物館に京都市が寄贈した本物の京町家が移築・展示されており、日常的に日本文化を体験できる機会を提供してくれています。

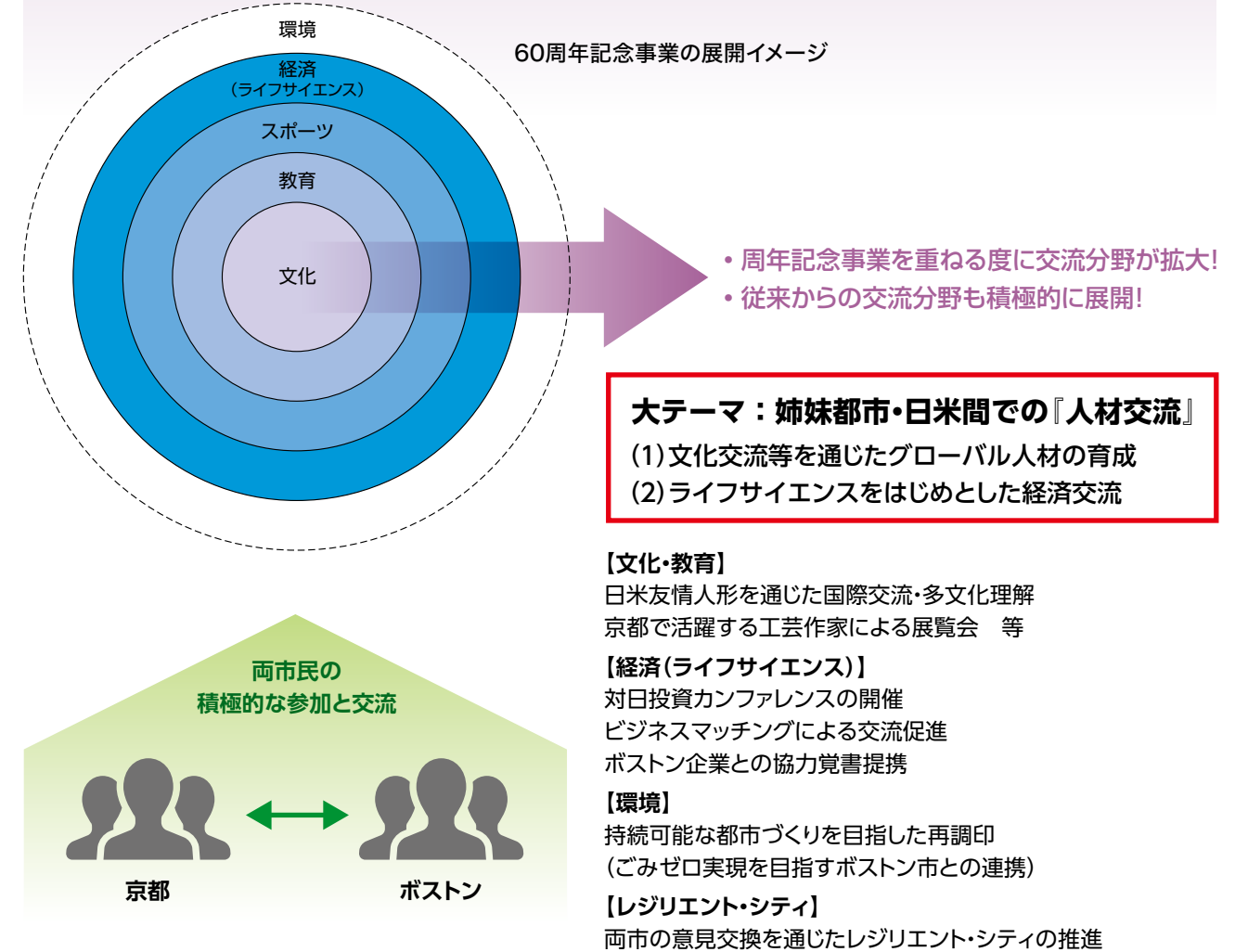
教育面では、両市の青少年使節団による相互派遣を行った後、近年では高校生や小学生達によるボストン訪問・現地交流が毎年行われています。

また、スポーツ面でもボストンマラソンに「京都市長賞」を贈呈したほか、メジャーリーグの人気球団ボストン・レッドソックスや企業スポンサー支援のもと「日米青少年野球交流事業」を実施してきました。

60周年記念事業では…

そして、60周年記念事業では今後の末永い交流を目指し、姉妹都市間・日米間での「人材交流」という大きなテーマを掲げ、これまでの両市の固い絆を改めて振り返り、文化・教育面での交流を一層深めるとともに、現代にあわせた形で新たな分野での「経済交流(ライフサイエンス分野)」も積極的に行われました。

政策面においても、両市長による意見交換において、ともに100RC(Resilient City)に選出されているレジリエント・シティとして、環境分野での連携も新たに確認するなど、持続可能な都市を目指していくことを確認しました。

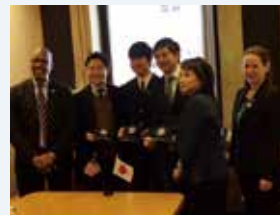


姉妹都市提携60周年記念事業(2019年)

60周年記念事業全体スケジュール

in Boston

ボストンにおいて実施



堀川高校生がボストン市庁舎を訪問

日本文化を紹介するキックオフイベントを開催@ボストン市役所



京都市代表団が市民訪問団約60名とボストンを訪問
様々な交流事業を実施



同志社小学校生徒が交流事業を実施
@ボストン子ども博物館

9/10~11/10

工芸京都ボストン展@SAC

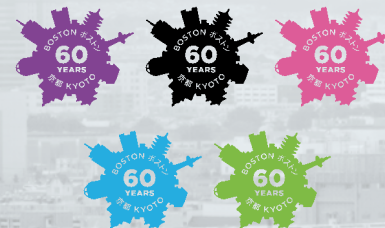


もとやま畳店の協力による畳張替えを実施
@ボストン子ども博物館



1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月

記念ロゴマークを発表



5色展開で記念グッズ(缶バッジ・ステッカー)を作成



4/10~5/19
京都工芸の精華2019展
@中信美術館

5/23~6/3
エミリー・ディキンソンの世界展
@松栄堂薫習館



市民公開シンポジウム「美術から見る世界文化都市とは」を開催
@ANAクラウンプラザホテル京都
「世界の絵本展」を開催@kokoka
「ハーバード大学サマースクール
記念イベント」を開催@同志社大学
ライフサイエンス分野における
対日直接投資カンファレンスを開催
@京都経済センター



「ボストンの夕べ」を開催
@京都駅ビル
「アメリカ音楽祭」を開催
@京都駅ビル
ボストン市代表団が
京都を訪問



記念フォーラム「世界を見据えたキャリアデザインとは？」を開催
@同志社大学

12/7~12/22
京都工芸の現代(いま)
@京都伝統工芸館



in Kyoto

京都において実施

9/14~10/31

姉妹都市パネル展@京都駅ビル

2019年2月

京都・ボストン姉妹都市提携60周年記念ロゴマークを発表 ～ボストン子ども博物館がデザイン～

60周年記念ロゴマーク



作者 Karin Hansen氏によるデザインの説明

このロゴは、京都とボストンのスカイラインを表しています。両市には個性的な建築物があり、それらは文化と創造力の象徴でもあります。建物は人を集める力を持ち、そこで交流が生まれ、人々が繋がっていきます。

BCM(Boston Children's Museum)には姉妹都市20周年を記念して京都から贈られた、本物の町家がありますが、そこには毎日多くの人たちが訪れ、日本文化に触れ、学び、交流が生まれています。この共通点であり、2つの市を繋ぐ「建物」にインスピレーションを得ました。そして丸い形は、60周年を「還暦」と合わせ、一巡した意味を表現すると同時に「和」も表しています。

この和(還)は、これからも京都市とボストン市の友好関係が続いていくように、という願いが込められています。



Karin Hansen

ボストン子ども博物館のクリエイティブ・デザイナーとして約14年勤務。広告、ビデオ、マーケティング用の素材などの製作を担当。子どもから大人まで幅広い世代の人たちの遊び心や好奇心をそそるデザイン、かつスタイリッシュでクオリティーの高い作品を手掛ける。

2019年3月

ボストン市庁舎でキックオフイベントを開催



道井総領事(当時)による開会挨拶

在ボストン日本国総領事館及びボストン市の主催により、ボストン市庁舎内でキックオフイベントを開催。多数のボストン市民に向けて、日本文化のデモンストレーションや日本食紹介が行われ、両市の60周年が大きくPRされました。



京都の子ども達による絵画作品



2019年3月

堀川高校の生徒一行がボストンを訪問



2019年3月、堀川高校1年生が海外研修の一環として、ボストン市庁舎を訪問。出発前に京都市長から預かったボストン市長宛のレターをしっかりと届けていただきました。海外研修を終えた生徒たちは改めて京都市役所を表敬訪問。懇談では、開会中の市議会へと招待されたことなどを報告。次月に控えた京都市代表团訪問に先駆け、両市の友好関係の発展に大きな貢献をしていただきました。

2019年6月

同志社小学校の生徒一行がボストンを訪問



2019年6月、同志社小学校6年生が修学旅行で、米国アーモストを始めとするニューイングランド地方を訪問。ボストン子ども博物館では、記念ロゴマークのTシャツを着ながら、工夫が凝らされた日本文化を紹介するプログラムを披露し、活発な交流を実施していただきました。



2019年4月
京都市代表团・市民訪問団がボストンを訪問

月日	主な内容
4/25	・ ライフサイエンス フォーラム(ボストン市主催)[ケンブリッジ・イノベーションセンター] ・ ボストン子ども博物館訪問(館長との懇談等)、マサチューセッツ工科大学(MIT)での対話会聴講
4/26	・ ライフサイエンス施設の見学(※撮影禁止) ・ ボストン市役所訪問(ボストン市長との懇談、再調印式) ・ ボストン日本協会ガラディナー
4/27	・ 京都南ロータリークラブ植樹式(ボストン市へ京の花ツバキ(ナツツバキ)を寄贈) ・ ボストン日本祭り(1日目)参加 ・ ボストン子ども博物館での文化事業(京都の陶芸家によるワークショップ,青い目の人形米国里帰りプロジェクト)
4/28	・ ボストン日本祭り(2日目)参加

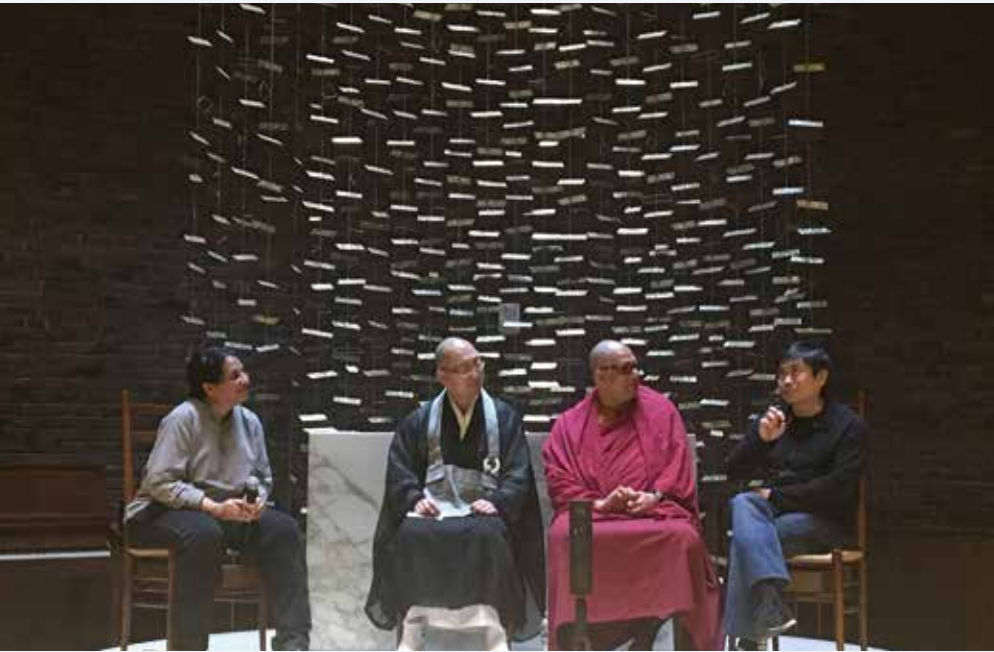
ライフサイエンス フォーラム(ボストン市主催)

ボストン市主催による再生医療をはじめとしたライフサイエンス分野の関係者によるフォーラム(プレゼン及び討論会)を実施。京都側から研究者、ジェトロ京都や京都の企業も参加し、活発な意見交換や交流が行われました。



ボストン子ども博物館でのセレモニー

キャロル・チャーノー館長(写真上:左端)との懇談後、館内で歓迎セレモニーを開催していただきました。ボストンの子ども達による日本語での歌の披露に一同大感激!!



MITでの対話会

「Mind, No Mind, AI Mind」をテーマに松山大耕氏(退蔵院副住職)、テンジン氏(ダライ・ラマ倫理センター僧侶)、伊藤穰一氏(MITメディアラボ所長)(写真左:左端2番目から)の三者による対話会が行われ、聴講した学生たちからも高い関心が寄せられました。



ボストン市庁舎を訪問

Do You Kyoto? の取組を紹介。マーティン・ウォルシュボストン市長から、門川大作京都市長、寺田一博京都市会議長に60周年を記念したユニフォームをプレゼントして頂きました。



京都市の地球温暖化対策の取組を紹介



〈京都からボストンへの寄贈品〉

◆歌川広重「保永堂版 東海道五拾三次絵巻※」
(提供元:トッパンフォームズ株)

※浮世絵版画の歴史で最も卓越した作品の一つとされている歌川広重の「保永堂版 東海道五拾三次」。ボストン美術館の浮世絵版画コレクションの中から厳選し、江戸から京都までの55点の復刻を実現している。
(ボストン美術館学芸員セーラ・E・トンプソン氏の解説付き)

◆大杉真司氏作「舞妓富士」
(提供元:株リアル)



日本国京都市及びアメリカ合衆国ボストン市の間における
姉妹都市提携再確認書

京都市とボストン市は両市の市民の共通の願いを代表し、両市の姉妹都市提携60周年を記念して、ここに正式にその絆を再確認する。

両市は社会発展、経済発展、住民の福祉の更なる進展に努力する。

両市は密接な協働とパートナーシップをもって、相互理解と信頼関係の構築に努める。

両市は以下の手段をもって、市民の自由と幸福のため共に努力することに同意する。

- 文化、教育、産業、観光の相互交流を推進する。
- 先端産業と医学の研究開発における協力を推進する。
- 両市のレジリエンスを強化するために、また、環境と調和した持続可能な社会を構築するために協働する。
- 一方の都市が受けるであろう苦難を救済する努力をする。

この文書は、京都・ボストン両市民の意思を反映したものであり、2019年4月26日に両市の代表者によって確認される。

マーティン・ウォルシュ 門川 大作 寺田 一博
ボストン市長 京都市長 京都市会議長

再調印式

新たに「レジリエンスの強化」や「環境と調和した持続可能な社会の構築」に向けた協働が確認され、両市長、京都市会議長が再調印書に署名しました。



会場の様子
(インターコンチネンタル ボストン)



本庶佑特別教授のビデオメッセージ

ボストン日本協会主催ガラディナー

日米親善のため多くの文化的、社会的行事を開催してきたボストン日本協会から、門川市長、本庶佑氏(京都大学特別教授)、松山大耕氏(退蔵院副住職)の3名が表彰され、日米間、姉妹都市間の友好親善に係るこれまでの貢献に対する感謝や今後の活躍への期待の言葉が贈られました。また、会場では京都市民訪問団から来場者に向けて天ぶらの提供や、日本舞踊の披露があり、会場にいた多数のボストン市民を魅了しました。



西川充氏(当時)の日本舞踊披露



(左から)マット・クレプス専務理事、MITメディアラボ所長 伊藤藤一氏、松山大耕氏、ビル・ハント会長



(左から)ビル・ハント会長、マット・クレプス専務理事、門川市長、ピーター・グリーリ特別顧問



天ぶら圓堂による料理の提供



京都南ロータリークラブによる植樹式

京都南ロータリークラブからボストン市に対して、「京の花」の一つであるツバキにちなんだ「ナツツバキ」が寄贈されました。市民憩いの場として知られる植物園パブリックガーデンにおいて、京都、ボストン両市のロータリークラブのメンバーが見守る中、植樹式が開催されました。



ナツツバキがきれいな
白い花を咲かせました!
(2019年7月撮影)



ボストン日本祭り

全米最大規模の
ボストン日本祭り



ボストン日本祭りオープニングで挨拶する門川市長



マンガ作家による似顔絵レクチャー
(京都国際マンガミュージアム)



鏡を見ながら自分の似顔絵に挑戦

毎年4月に全米最大規模で行われている「ボストン日本祭り」において、「京都ブース」を設置。京都国際マンガミュージアムの作家による「似顔絵ワークショップ」や「京都市民訪問団によるレクチャー」等を通じて、多くのボストン市民にマンガや食文化など京都や日本文化への理解を深めてもらいました。



京都市が設置したブース



現地ボランティアの方々と京都文化を紹介



あんぱんの試食付きレクチャー(株ヤタロー)



日本舞踊のレクチャー(NPO法人京都文化企画室)



京都ラーメンの試食付き出汁文化レクチャー(麺屋 優光/株クリップ島田氏)



数珠プレスレット作りに挑戦(京都南RC)



盆踊りでクロージング



左からスマイル21プラン委員会メンバー、寺田市会議員、チャーノー館長

青い目の人形米国里帰りプロジェクト

1927年、同志社大学で教鞭を取られていたギュリック博士が、日本全国の子どもたちに贈った青い目の人形のうち、市立高倉小学校では当時の人形「メリー」が大切に保管されています。ボストン子ども博物館においても答礼人形として日本から贈られた「ミス京都」が展示されており、姉妹都市提携60周年を契機として、90年ぶりに米国に里帰りした友情人形同士の対面セレモニーが盛大に行われました。



左から寺田市会議員、陶芸家 今井真正氏

工芸ワークショップ

ボストン子ども博物館内で子どもたちを対象に、京都の陶芸家による工芸の魅力を伝えるワークショップを開催しました。



左から寺田市会議長、松山大耕氏、中小路健吾長岡京市長、吉村幹生氏(フェンウェイ・スポーツ・マネジメント)

ボストン・レッドソックス球場での挨拶
メジャーリーグ球団のボストン・レッドソックスと京都市は、これまで「日米青少年野球交流プログラム」を実施し、スポーツ分野での交流を行ってきた縁があります。今回の訪問では試合開始前に、京都市代表团がボストンを訪問中であることが紹介され、京都市会議長がグラウンドから多くの観客に向けて京都・ボストン姉妹都市提携60周年のPRを行い、球場の客席から暖かな拍手が送られました。

2019年5～6月 京都でエミリ・ディキンソンの世界展を開催

エミリ・ディキンソンの世界展

会 期：5月23日～6月3日
会 場：香老舗 松栄堂 薫習館(くんじゅうかん)
主 催：京都日米協会



香に親しんでいる現地の米国人たちがディキンソンの詩を愛好していたことから、京都日米協会主催による企画展が実施されました。死後に発見された約1800編の詩は、生と死、自然などのテーマが心に響く詩ばかり。アメリカ、日本を始め、世界中でたくさんのファンの心をつかんで離しません。会場では、エミリが創作した詩やマサチューセッツ州アマストの自然、その魅力紹介とともに様々なプログラムが行われました。



- 〈関連プログラム〉
- 下村伸子氏(日本エミリ・ディキンソン学会長)による講演会(5月26日)
 - 映画上映会「静かなる情熱エミリ・ディキンソン」(5月26日)
 - サロンコンサート「～薫風に舞う～フルート・ヴィオラ・ハープの調べ」(5月30日)
 - 聞香席(もんこうせき)「メイフラワー香を楽しむ会」(5月24・25日)
掌の聞香炉に心を傾け、一片の香木のかすかな香りを心ゆくまで鑑賞する。この繊細な所作は「聞香(もんこう)」香を聞く、という美しい言葉で表現されます。会期中、ディキンソンの詩をもとにボストンで創作された組香「メイフラワー香」が楽しめました。
 - 松寿文庫 香道具展示&畑正高氏によるギャラリートーク「海を渡った香道具」(5月28・29日)
香老舗 松栄堂主人である畑正高氏が、1980年代に初めてボストンへ訪れる機会をつくった香道具。その際に出会った2点の香道具のうち、蒔絵の美しい1点の香道具は20年ほど後に日本へと持ち帰られることに。更にその後、日本で偶然にも関連した他の香道具が見つかっています。

2019年7月

京都でライフサイエンス分野の会議を開催



ライフサイエンス分野における
対日直接投資カンファレンス
in 京都

2019年7月、京都経済センターにおいて京都市・経済産業省・ジェトロの主催で開催。
ボストンから招待した企業11社のリーダーの方々に、京都の魅力や立地環境・京都企業とのビジネス交流促進に向けてトップセールスが行われるとともに、ボストン企業との連携候補先の京都企業による事業紹介も行われました。



2019年7月～8月

市民公開シンポジウムや世界の絵本展を開催

市民公開シンポジウム 美術から見る世界文化都市とは

開催日：8月9日
会 場：ANAクラウンプラザホテル京都
主 催：ANAクラウンプラザホテル京都(京都市共催)

門上武司(株)ジード代表の進行のもと、京都市立芸術大学 赤松学長、松栄堂 畑社長、細見美術館 細見館長によるシンポジウムを開催。ボストン美術館の歴史や、ボストンとの文化交流、アートを通じたグローバル交流などについてご説明いただきました。



レセプションにはボストン市名誉市民でもある裏千家・千玄室大宗匠もサプライズでお越しに



世界の絵本展2019

会 期：7月31日～8月4日
会 場：京都市国際交流会館(kokoka)
主 催：(公財)京都市国際交流協会

(公財)京都市国際交流協会が所蔵するアメリカの絵本を展示するとともに、さまざまな関連イベントが開催されました。



展示会場の様子

〈展示内容〉

- ポスター・写真で知る姉妹都市ボストン
 - ボストン美術館浮世絵ベスト・セレクション保永堂版「東海道五拾三次絵巻」(復刻版)展示
 - 同志社小学校ボストン・マサチューセッツ州修学旅行報告
- 〈関連イベント〉
- オープニング
青い目の人形お里帰りプロジェクト報告／フラダンスのステージ
 - 浮世絵木版画実演とワークショップ
 - Book Reading: Exploring Boston!



プロジェクト報告の様子
(岸田蘭子 市立高倉小学校校長)

2019年9月～11月

ボストン・京都の両市で工芸展覧会を開催

9月10日～11月10日、ボストン市のウォーターフロント地区に位置するSAC(Society of Arts & Crafts)において、現代工芸界の巨匠から新鋭まで様々な工芸作家で構成される作家集団・工芸京都の展覧会を開催。オープニングには多数のボストン市民が参加し、2ヶ月にわたり開催された初のボストンでの展覧会は現地で大きな話題となりました。



広報物

ボストンで開催



ボストンでの連携企画



ボストン美術館、ハーバード大学、ボストン日本協会、ボストンカレッジ等において、作家によるレクチャーやワークショップの連携企画を実施。参加したボストン市民から高い関心が寄せられました。



京都で開催



12月13日、パネルディスカッション「アメリカ文化とKOGEI」を開催(会場:京都美術工芸大学 KYOBIホール)。
ボストンで開催した展覧会の様子等について、6名のパネラーが意見交換を行い、工芸を学ぶ多数の学生が聴講しました。



ウォルシュボストン市長を表敬訪問



会場のSAC

京都工芸の精華2019展

会 期：4月10日～5月19日
会 場：中信美術館
主 催：(公財)中信美術奨励基金
共 催：作家集団・工芸京都



京都工芸の現代(いま)

-Educational Exhibition Program-

会 期：12月7日～12月22日
会 場：京都伝統工芸館5階
主 催：作家集団・工芸京都
協 力：京都伝統工芸館、
京都伝統工芸大学校



2019年10月
ボストン市代表団が京都市を訪問

月日	主な内容
10/21	・ 経済分野の交流に係る意見交換会（京都経済センター）、企業視察（島津製作所、京セラ、京都リサーチパーク）
10/22	・ 二条城、文化施設訪問（松栄堂）等
10/23	・ 京都市役所表敬訪問 ①市長との懇談 ②京都国際観光大使任命式（小川珈琲） ③ライフサイエンス分野における協力覚書提携
	・ 京都市におけるレジリエント・シティの取組紹介
	・ 小川珈琲本店、京都大学訪問 等
10/24	・ 環境施設の視察（京都市南部クリーンセンター／環境学習施設さすてな京都）
	・ 学校訪問（京都市立高倉小学校／京都市立堀川高校）
	・ ボストン市代表団歓迎会



意見交換会
(マサチューセッツ州観光局長ケイコ・オラル氏)



企業視察の様子



世界遺産・二条城訪問



松栄堂訪問（間香体験）



（株）ファイブフォックスによるボストンをモチーフにした衣服の展示（京都高島屋）



展示に大興奮のボストン市代表団



（前方左から）モリカワ経営戦略ディレクター、カラ芸術・文化担当チーフ、プライアン都市計画・開発局長、門川市長、山本恵一議長、鈴木副市長



ライフサイエンス分野の提携
(左:ボストン市都市計画・開発局長ゴールデン・ブライアン氏)
(右:京都高度技術研究所理事長 西本清一氏)



京都国際観光大使任命式
(左:小川珈琲代表取締役 小川秀明氏)



藤田裕之レジリエント・シティ京都市統括監から京都市の取組を紹介



小川珈琲本店を訪問

〈ボストン市代表団〉

- ① ボストン市都市計画・開発局 局長

② ボストン市芸術・文化担当チーフ

③ ボストン市経営戦略ディレクター

④ ボストン市経営戦略マネージャー

⑤ マサチューセッツ州観光局 局長

⑥ SACエグゼクティブ・ディレクター

⑦ SAC財務責任者
- ゴールデン・ブライアン

カラ エリオット・オルデガ

ミドリ・モリカワ

サラ・デルード

ケイコ・オラル

ブリギッテ・マーティン

ポリー・アレン
- ⑧ ボストン日本協会理事

⑨ ボストン日本協会理事

⑩ GPIUS(株)(グローバル教育・人材育成サポート関連の米国法人)

企画コーディネーター

⑪ OGAWA COFFEE USA 代表取締役社長、CEO

⑫ U-CHU(ユー・チュー)(デンタル医療機器の米国企業)CEO

⑬ U-CHU(ユー・チュー)COO
- 森田喜代子

トビー・ローズ

アンガス・シェーファー

宇田 吉範

ダニエル・ワインスティン

ノア・ヒル

〈敬称略〉

京都市南部クリーンセンター／環境学習施設さすてな京都視察



クレーン運転の様子を見学



自転車発電体験コーナー

高倉小学校訪問



児童達へ本をプレゼント



児童たちとともに代表団を迎えた友情人形
(左から：マイケル、メリー、マンディ、メロディ)



児童たちとの記念撮影

堀川高校訪問



授業の様子を見学

2020年にボストンを訪問予定の
生徒達とも懇談

ボストン市代表団歓迎会



多数の市民とともにボストン市の皆様を歓迎



(左)ボストン日本協会森田喜代子理事に京都・ボストン両市
から感謝を伝えるサプライズセレモニー

(右)ボストン代表団とともにお里帰りの日本人形
「友子(ゆうこ)」さん

〈参考〉日米友情人形「友子(ゆうこ)」さんのお色直しについて

①人形寄贈に至る経過

平成6年(1994年)、設立90周年を迎えた「ボストン日本協会」の要請に応じて、皇后陛下から同協会に日本人形を寄贈いただきました。皇后陛下は、1979年から1985年までボストンに滞在され、その間ベルモント高校、ハーバード大学で学ばれる等ボストン市とは特別の御関係にあります。日本人形は外務省を通じて、ボストン日本協会に引き渡されました。この日本人形は、高さ53cmの市松人形で、「友子(ゆうこ)」と名付けられました。「日米友好親善」の「友好」が名前の由来となっています。

②人形のお色直し

代表団の一員として、人形とともに入浴したボストン日本協会森田理事から、「京都の職人の方々の技でお色直しをしてもらい、これからも両市の交流を深めていきたい。」という依頼を頂戴しました。

その思いを受け止め、この度、職人有志の皆様のお力で友子さんの髪の毛や着物を整えるなど一層綺麗な状態にすることができました(お色直し後、工芸京都の展覧会の会期12月7日～12月22日に合わせて、京都伝統工芸館内で展示していただきました)。

2019年9月～11月
本市及び実行委員会による主催事業

「ボストンのタベ」@京都駅ビル(2019年9月)

京都市内の高校生による吹奏楽演奏、大学生によるチアリーディングや、BMX(自転車競技)、ジャズ演奏などボストンやアメリカにゆかりのある音楽・パフォーマンスを披露しました(約1,000名の市民が参加)。
同時に、京都駅ビル開発㈱との共催による姉妹都市交流の軌跡を振り返るパネル展も6週間に渡り開催されました。

プログラム

- (1) 京都市立日吉ヶ丘高等学校 吹奏楽部
- (2) 京都女子大学チアリーディング部GALAXIE
- (3) BMXパフォーマンスショー YUYA
- (4) ジャズミュージック演奏 The Kansai Jazz Connection

人気お笑い芸人の
マテンロウ、祇園も
随所に登場



吹奏楽の演奏



チアリーディング



ジャズ演奏



BMXパフォーマンス

同時開催

パネル展「国際姉妹都市祭 in 京都駅ビル ～情緒あふれるボストン～」

京都とボストンの交流の経過、ボストンの風景など約100点のパネル展を開催。マサチューセッツ州政府観光局の協力により、ボストンの魅力溢れる写真も多数展示されました。

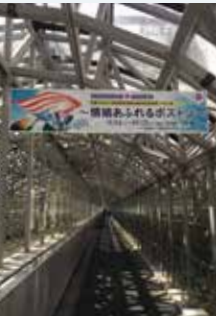
開催期間：9月14日～10月31日

場 所：京都駅ビル10階 空中径路

主 催：京都駅ビル開発株式会社

共 催：京都市

協 力：マサチューセッツ州政府観光局



記念フォーラム「世界を見据えたキャリアデザインとは？」@同志社大学(2019年11月)

幅広い分野でグローバルに活躍する出演者を招いたフォーラムを開催。日米をはじめとした海外との異文化交流を通じて得られたもの、その体験が人生に与えた刺激などの意見交換を通じて、これから先のキャリアを考えたい学生等が今後自身に必要な行動等をイメージする契機となりました(約90名が参加)。

〈モデレーター〉



村田 晃嗣氏
同志社大学法学部教授
京都日米協会会長

〈パネリスト〉



ジョージ・ソルト氏
同志社大学
グローバル教育センター
准教授

アーモスト大学法学部卒業。カリフォルニア大学サンディエゴ校国際政治学修士号修得。同校日本近代歴史学博士号修得。元ニューヨーク大学歴史学部教員。日本の政治・文化、日米外交史が主な研究対象。学生達に向けた授業では、歴史と文化の勉強を通じて、今後進むキャリアに関わらず活かすことができるよう、徹底した調査、オープンエンドな分析、説得力のある議論を行い、分かりやすい文章表現の力を培うことを目指している。
著書『ラーメンの語られざる歴史 世界的なラーメンブームは日本の政治危機から生まれた』(2015年)。



松山 大耕氏
退蔵院副住職

1978年京都市生まれ。2003年東京大学大学院農学生命科学研究科修了。2007年より退蔵院副住職。2009年観光庁Visit Japan大使、2011年より京都観光おもてなし大使に任命される。2016年『日経ビジネス』誌の「次代を創る100人」に選出され、2018年より米・スタンフォード大客員講師。2019年文化庁長官表彰(文化庁)、重光賞(ボストン日本協会)受賞。2011年日本の禅宗を代表してヴァチカンで前ローマ教皇に謁見、2014年には日本の若手宗教家を代表してダライ・ラマ14世と会談。世界経済フォーラム年次総会(ダボス会議)に出席するなど、世界各国で宗教の垣根を超えて活動中。



細尾 真孝氏
㈱細尾常務取締役
MITメディアラボ
ディレクターズフェロー

1978年、西陣織老舗 細尾家に生まれる。細尾家は元禄元年に織物業を創業。人間国宝作家作品や伝統的な技を駆使した和装品に取り組む。大学卒業後、音楽活動を経て、大手ジュエリーメーカーに入社。退社後フィレンツェに留学し、2008年に細尾に入社。2012年より京都の伝統工芸を担う同世代の若手後継者によるプロジェクト「GO ON」を結成し、国内外で伝統工芸を広める活動を行う。2014年日経ビジネス誌「日本の主役100人」に選出。2016年、マサチューセッツ工科大学(MIT)メディアラボディレクターズフェローに就任し、西陣織と最先端のテクノロジーの融合による革新的なテキスタイルの開発を行う。



山本 光世氏
JOHNAN(株)
代表取締役社長兼CEO

1973年、京都府宇治市に生まれる。同志社大学神学部在学中に、大手新聞社による奨学金制度を利用し、新聞配達業務等を行いながら、学費および生活費を賄い、卒業。その後、ベンチャー支援会社にて経営コンサルティング、新事業開発を経験。財団国際親善奨学金制度などを活用し、University of Michiganに留学し、MBA(Master of Business Administration)およびMS(Master of Science)を取得。その後、JOHNAN株式会社にて、M&Aなどの業務資本提携や新規事業投資、組織文化改革に従事。2010年に代表取締役社長兼CEOに就任。

記念フォーラム「世界を見据えたキャリアデザインとは？」@同志社大学

〈当日の内容〉

趣旨

本年、京都市はボストン市との姉妹都市提携から60周年を迎えました。この節目の年を契機に、姉妹都市間・日米間での「人材交流」を大きなテーマに掲げ、年間を通じて「文化交流等を通じたグローバル人材の育成」と「ライフサイエンスをはじめとする経済交流」を柱とした記念事業を展開し、両市間の絆を深めています。

本フォーラムでは、大学・伝統産業・禅文化・ビジネス等の幅広い分野でグローバルに活躍する方々をお招きし、これまでの体験談の紹介や、パネリスト間ディスカッションを行います。日米をはじめとした海外との異文化交流を通じて得られたもの、その体験が人生に与えた刺激などの意見交換を通じて、特にこれから先のキャリアを考えたい方達が、今後自身に必要な行動等をイメージする契機となることを目的として開催しました。

当日の内容

駐大阪・神戸米国総領事館広報担当領事アリシア・エドワーズ氏の挨拶からはじまり、4名の出演者がそれぞれの生い立ち、今のキャリアの転機となった体験などキャリアデザインについて語っていただきました。

各出演者からの活動紹介

▶ソルト氏：

日本で生まれ、子ども時代の数年を東京で過ごし、その後ボストンのアーモスト大学で日米関係、日本史を学び、さらに深く日米関係・日本の近代史を研究するために大学院に進みました。独自の角度からの日本についての研究を進め、ラーメンの歴史についての本を出版しました。ラーメンの材料である小麦から貿易の歴史を、また屋台の動向からまちの歴史を調べました。その日本語訳が出版される頃、同志社大学の



ハーバードサマースクールのアシスタントをしたことがきっかけとなり、現在の仕事に就くことができました。大学時代からずっと日本について勉強をしてきましたが、この4年間で日本史と日本の文化についてまだまだ分からないことがあると感じており、毎日新しい発見ができる京都での生活にありがたみを感じています。

▶細尾氏：

西陣織が家業でしたが、保守的なイメージがあり、継ぐつもりはなくミュージシャンとして活動をしていた時期がありました。家業に戻った理由としては、西陣織を海外に展開した事例が当時はあまり無かったので、これならクリエイティブな仕事ができるのではないかと考えたからです。

西陣織の可能性を広げるため、西陣織を使用したクッションの販売をしてきましたが、3年間は赤字でした。それが海外での展覧会をきっかけにアメリカ人建築家のピーター・マリノ氏から西陣織を使用したテキスタイルの制作の依頼があり、クリスチャンディオールの内装の素材として展開していくことになりました。「和柄」から「素材」へと発想を切り換えたことが転機となりました。150センチ幅の織機を製作し、現在では多くのブランドやホテルの内装素材として世界中で京都の西陣織が使われています。そして、クラゲのDNAを蚕に組み込み光るシルク素材で織る取組や、マサチューセッツ工科大学（MIT）では織物のデザインをコンピューター化するなど新しい試みを進めています。今後も、最先端技術と伝統技術の掛け合わせ・コラボレーションが加速していくでしょう。



▶松山氏：

中学、高校とキリスト教の学校で学んだことが今の自分を形作っています。最初のアメリカ体験についてですが、14歳の時に英語が全く分からない状態で飛行機のチケットだけ

購入して10日間アラスカに一人旅をしました。その経験を通じて、「英語ぐらいできないと話にならない」ということと同時に、「人生なんとかなるな」という2つのことを学びました。

学生の頃は、お寺は継ぎたくないと考えていまし

た。東京大学では最初は文系を専攻していましたが、3年生の時に転部した農学部には多くの海外からの留学生がいて刺激になりました。大学院時代には、長野の農家に住み込みで研究する機会があり、尊敬する和尚さんに出会いました。檀家が一軒もない、観光もしていない、托鉢（たくはつ）だけで生活しておられる。この時代に托鉢だけで生活されているという立派な方がおられるのであればこの世界は間違いないのではないか、という憧れを持って今の世界に入っていたのです。お坊さんの姿をして参加した卒業式では「関係者以外お断り」と止められたことも。世間から全く切り離された厳しい修行を経ましたが、「満開の桜の下で薪割りなんて最高やね」と言われたことで意識が変わりました。お坊さんになった後、私にはキリスト教を学んだというバックグラウンドもありますので、カトリックのお坊さんとの交流や、ミラノ大司教、ローマ教皇、ダライ・ラマ殿下とお会いし、ダボス会議に出席するなど宗教を越えた活動させてもらっています。自分が今、英語が話せるというのは良かったとは思いますが、これから若いみなさんの世代においては英語が話せるということは当たり前になっていきます。誰もやっていない専門性が世界で通じる重要なパーツになると思います。



▶山本氏：

私は会社の4代目ということになります。細尾さん、松山さんのように昔は自分も家業は継ぎたくないと考えていました。趣味は貯金というあまり可愛げのない子どもだったと思います。大学に進学した頃、バブル経済が崩壊し、家業も苦しい状態で奨学金制度を使わせて頂くと同時に、新聞配達をし

ながら大学へ通い、海外留学もしました。

家業を継ぐまでには紆余曲折がありましたが、祖父が亡くなったことが大きかったです。当時の弊社は大手電機メーカーの100%孫請けで電子部品の基板の製作などをしていました。会社を継いだ際も、リーマンショックで会社を最低限存続するために拠点閉鎖や人員整理などを進めることが最初の仕事でした。そんな中で、会社は社会に必要とされる事業を作り続けなければならない、またどんなことがあっても耐えられるような強い会社にならなければならないと強く思っていました。私が代表に就任してから実行すると決めたことは、既存事業は他のメンバーに任せ、自らがリスクを負って新規事業にチャレンジすることでした。

現在、弊社は半導体部品の製作・医療機器の会社やロボティクス会社の買収等を経て、200社以上のお客様と取り引きしています。工場のオートメーション化につながるロボティクスの分野では、米国企業と共同開発を進めています。その共同開発では、留学時の経験などが活かしていますので、若い方にも是非、海外留学に挑戦してほしいなと思います。



意見交換会

●村田教授：

皆様、貴重なお話をありがとうございました。以下2点についてお尋ねします。

- ①日本とアメリカの関係で、ここ15～20年の間の大きく変化したと感じることはなんでしょうか。
- ②また、京都における海外との交流の可能性や、姉妹都市ボストン



記念フォーラム「世界を見据えたキャリアデザインとは？」@同志社大学

との共通点を感じる部分があれば教えてください。

▶ソルト氏：

情報の入手のしやすさが格段に進歩しました。その分、専門家の知識の価値や発信力が試される時代です。ボストン出身者としては、京都とボストンはともに若者が勉強熱心でよく似ていると思います。

▶細尾氏：

MITに誘ってもらった自分がまさにそうですが、分野の垣根を超えた取組がもっと一般的になるでしょう。理系だけの研究ではなく、様々な分野の研究をどう掛け合わせていくかという実験的なプログラムが求められています。その中でも「美」は普遍的なものであり、両市ともにクラフト王国です。「美」は最大の機能であり、京都の美とエンジニアリングは表裏一体です。京都には多くの伝統産業があって、様々な分野との掛け合わせでこれから新しいものが生まれていくと思います。私もその取組を追求しています。

▶松山氏：

情報発信が双方向的になりました。京都にいても、きちんとした情報であれば世界に発信されていく世の中です。よく「自分のことは自分が一番よく分かる」と言いますが、私は違うと思います。私のキャリアのほとんどが頼まれ仕事で、周りの人の方が自分をよく見てくれています。自分の能力を人が開いてくれるのは交流の賜物です。お寺を外国人の方がプロポーズの場所に使うような時代になりました。お寺の概念も日本人とは違って面白いです。

▶山本氏：

今は留学が前向きなものとして認知されてきています。留学情報や奨学金制度も多くあって、以前に比べれば便利になったと思います。その一方で、せっかくの苦労を経験する機会が失われているかもしれません。

米国とは医療機器分野での連携をする機会が多いです。支払いが進捗状況に合わせて行われるなど日本とは契約方法が全く違うけれども、最終的には合意できます。フランス

の外科医アンブロワーズ・パレが残した言葉で「我包帯す、神癒し賜う」という人間観が医療機器開発にも生きています。契約書では見えない人間観や、哲学といったものの信頼の積み重ねが大切だと感じています。

●村田教授：

ありがとうございます。皆様に追加でお伺いします。

- ③人工知能のようなサイエンスの進歩が目覚ましい中で「人間がどこまでサイエンスをコントロールできるか?」という漠然とした不安を感じている方も多いと思いますが、哲学や宗教の役割をどのように考えるでしょうか。
- ④また、京都の問題点について教えてください。

▶松山氏：

宗教の役割は大きく変わっていくでしょう。「この薬を飲まないと死んでしまいますよ。」と言うより、「この薬を飲まないとボケてしまいますよ。」という言葉の方が患者には効くそうです。人には老いることへの不安があります。そのような不安や苦しみを和らげる役割が求められていくと思います。宗教に共通するものは祈りです。

▶ソルト氏：

良心教育と宗教はとても大事だと感じます。また京都の問題点ですが、今は観光客が多すぎるかもしれません。

▶細尾氏：

私の仮説ですが、人間にとって美は必要不可欠なものです。京都にはもったいないことが溢れています。東京のような大都会でない都市サイズだからこそ、松山さんのような方とも日常的に出会うことができますので、若い方達はもっと積極的に話しかけてみてはどうでしょうか。また、京都は工芸や文化を身近に感じられる場所ですので、もっと活用してほしいと思います。

▶山本氏：

京都は自前主義でやり過ぎるところがあるのではないのでしょうか。私もビジネスを展開する時には様々な方たちの力を借

りています。もっと様々な分野で連携を深めていくべきだと思います。

▶松山氏：

京都には危機感が欠如していると思います。一方で、過去の歴史を振り返れば本当のピンチが京都を蘇らせてきました。直近で言えば東京への遷都がそうです。

●村田教授：

貴重なご意見ありがとうございました。連携の重要性という話も頂きましたが、私も京都は神戸・大阪など近隣都市との連携をもっと深めて、関西全体でものごとを考えていくことが重要だと思います。聴講者の皆様からご質問はありますでしょうか。

<聴講者からの質問>

⑤インターネット社会の現代をどのように感じますか。

⑥世界での活躍を目指すにあたり、異なる価値観を持つ人と付き合う時に重要なことを教えてください。

▶山本氏：

インターネットをはじめデジタル化が進んでいる中で、音や匂いなど五感で感じる部分、つまり生身に触れる情報はいま

だ変わらないままです。今後は体感する情報の大切さが見直されていくのではないのでしょうか。

▶ソルト氏：

異なる価値観を持つ人と何かする際には、趣味などの共通点を見つけると良いと思います。大事なのはチームワークです。

▶細尾氏：

今後、Diversity(多様性)が進む中で、京都が持つ1200年の歴史を活用していくことが一つの強みになると思います。

▶松山氏：

よく「Diversity&Inclusion(多様性と社会包摂)」という言葉聞きますが、私は「Diversity OR Inclusion」が正しいと思っています。世の中には話が通じない人が存在する。だからこそ多様性と言えます。大切なことはそれを自分がきちんと認識しておくことで、話が分かり合えない人とどうやって向き合っていくかが重要です。

●村田教授：

意見交換を通じて出演者の皆様からは、耳に残るどころか心に残るお話が頂けました。本日はありがとうございました。以上



還暦を迎えた2019年、
年間を通じて両市民の皆様とともに多彩な事業を展開

月日	名称	会場	主催等
2018年	60周年プレイベント		
6/11～13	演奏会「IN THE CURRENT時の流れに」	二条城等	アジア・アメリカ現代音楽協会
2019年	60周年イベント		
3月26日	60周年記念「還暦」キックオフイベント	ボストン市役所	在ボストン日本国総領事館等
3/30～ 3/31	京都アメリカフードフェスティバル(11月も開催)	kokoka(京都市国際交流会館)	京都アメリカフードフェスティバル実行委員会
4/10～ 5/19	展覧会「京都工芸の精華2019」	中信美術館	作家集団 工芸京都、中信美術奨励基金
4月25日	ライフサイエンス・フォーラム	CIC (Cambridge innovation center)	ボストン市
4月26日	日本協会ガラディナー	インター コンチネンタル ボストン	ボストン日本協会
4月27日	CELEBRATE TOMODACHI FRIENDSHIP!	ボストン子ども博物館	ボストン子ども博物館
4/27～4/28	ボストン日本祭り	ボストン・コモン	ボストン日本祭り実行委員会
5/23～ 6/3	女流詩人エミリ・ディキンソンの世界展	松栄堂 薫習館	京都日米協会
6月	同志社小学校6年生の修学旅行(文化紹介)	ボストン子ども博物館	同志社小学校
7月2日	対日直接投資カンファレンス(ライフサイエンス)	京都経済センター	京都市・経産省・ジェトロ
7月5日	ハーバード・サマースクール10周年記念イベント	同志社大学	同志社大学国際センター
7月28日	京都歌と踊りの祭典	先斗町歌舞練場	京都新聞企画事業(株)
7/31～ 8/4	世界の絵本展2019	kokoka(京都市国際交流会館)	京都市国際交流協会
8月9日	市民公開シンポジウム「美術から見る世界文化都市とは」	ANAクラウンプラザホテル京都	ANAクラウンプラザホテル京都
8/10～ 8/11	乾杯のタベ ～カモン・ベイビー!ボストン!～	国立京都国際会館	国立京都国際会館
9月	小川珈琲機関紙「珈琲物語」で紹介	店舗等	小川珈琲(株)
9/10～11/10	工芸京都 展覧会 Contemporary Innovators in Japanese Arts and Crafts	Society of Arts & Crafts Boston	作家集団 工芸京都
9月14日	◎ボストンのタベ	京都駅ビル室町小路広場	京都市(国際化推進室)
※9/14～10/31	姉妹都市パネル展「情緒あふれるボストン」	京都駅ビル空中経路	京都駅ビル開発(株)
10/5～10/6	ナンタケットバスケット展示会	建仁寺両足院・長楽館	日本ナンタケットバスケット協会
10月13日	国際姉妹都市祭 アメリカ音楽祭	京都駅ビル室町小路広場	京都駅ビル開発(株)
10/16～10/29	ボストンをモチーフにした衣服展示	京都高島屋	(株)ファイブフォックス
10/18～10/20	幼児児童生徒作品展・姉妹都市交歓作品展	みやこめっせ	京都市教育委員会
11月14日	◎記念フォーラム「世界を見据えたキャリアデザインとは?」	同志社大学	60周年記念事業実行委員会
12/7～12/22	工芸京都展覧会「京都工芸の現代(いま)」	京都伝統工芸館	作家集団 工芸京都
	※12/13パネルディスカッション開催	京都美術工芸大学	作家集団 工芸京都
12月10日	SDGs・レジリエンス京都市民フォーラム2019	キャンパスプラザ京都	京都市(総合政策室)

◎赤字…京都市国際化推進室・姉妹都市実行委員会主催のイベント



両市において合計20件以上の事業や企画を実施。
うち8割以上を市民・関係団体等が自主的に企画運営！

特別インタビュー

01

畑 正高 氏

香老舗 松榮堂 代表取締役社長



姉妹都市交流は、京都と自分を見つめる貴重な機会。 ぶれない軸と楽しむ心を大切に、未来へつなげたい。

真摯に取り組めば、多くの人の心に響く。
その実感が、ボストンとの交流の原動力。

▶ボストンとの交流を始めるきっかけを教えてください。

ボストン日本協会の理事・森田喜代子さん(P.54)との出会いです。私がまだ若かりし頃、森田さんは、私の会社の先輩と同じ香道教室に通われていました。その先輩とともにニューヨークに出張した際、森田さんもニューヨークに来られており、お目にかかる機会を得ました。

それからしばらくして森田さんから、「とある個人コレクションの中に十種香箱(香席に用いられる諸道具が収められる箱)があるが、使い方を知っている人がいない。説明のためにボストンを訪れてはどうか」という手紙を頂き、「私の持つノウハウで、ボストンの方に喜んでいただけるのなら」という思いからお引き受けしたことが、ボストンとの交流のスタートとなりました。あれから38年経った今も、森田さんとの縁は続いています。

▶十種香箱の説明をされた時、現地の方々はどのような様子でしたか。

長年、誰に聞いてもわからなかった疑問が、私のような若造の説明で解消されたことに驚いておられました。「この十種香箱でお香を焚いてほしい」との要望に応え、私は再びボストンを訪れることになるのですが、その際に集まったのが当時のボストン日本協会のボードメンバーでした。茶道、華道、能、狂言といった日本文化を理解している彼らが、「こんな世界があったんだ」と、目を輝かせながら香席を楽しんでくれました。結果、この香席は「お香の会」として、ボストン日本協会のプログラムとして採用されることとなり今日まで続いています。

それ以降は、香炉を出す「香元」と記録係である「執筆」によって進めるきちんとした香席を行いたいと考え、当時、京都光華女子大学の助教授だった太田清史先生と二人で訪問するようになります。評判が口コミで広がったため、美術館や大学をはじめとするさまざまな施設・機関、またボストンだけにとどまらず、ニューヨークから小さな町まで、あらゆるところから依頼が入

ようになりました。多い時には、1、2週間滞在したり、8名ほどで動いたりするケースもあったほどです。プログラムも進化し続け、10年、15年経つ頃には、大学で1時間の授業をするようにまでなりました。

現地での移動手段は車でしたが、どこへ行くにも、細い道まで載っているボストンの地図を愛用していました。太田先生と行った時には、ハードなスケジュールをこなした後、夕食でその土地・季節の美味しいものを頂きながら、翌日の朝食と昼食の相談をしていましたね(笑)。そのスタイルが、私の30数年にわたるボストンでの活動の基本となっています。ボストンはアメリカの北東部に位置しますが、そうやって足繁く通っているうちに、どこへ行くにも必ず立ち寄り、身近な都市になりました。

▶畑さん自身が楽しんでいるからこそ、継続的な活動となったのだと感じます。

姉妹都市交流として訪れる先々で、ボストンの方の口から、日本や京都の伝統文化の継承に尽力・貢献されている方々のお名前が聞かれます。名前だけではなく、その足跡も知っておられるのです。また、「お香の会」で勉強されたアメリカの方から香席に招かれる機会もありました。自作の器を用いるなど、その真剣さが伝わってきましたね。日本文化に高い関心を持っている方は決して少なくはないのです。ですから私たちは、急ぐ必要はありません。真面目にきちんと自分のできる範囲で続けていれば、必ず心に響きます。活動を通じて体感したそんな思いが、継続の力になっています。

姉妹都市交流を起点に広がる 多様な伝統文化の可能性。

▶姉妹都市提携55周年の際には、長刀鉾祇園囃子一行による演奏活動にも携われました。

私の文化交流には、「ファイナンスは自分で面倒を見るべき」というルールがあります。長刀鉾祇園囃子の演奏活動は、まず囃子方の方からその点についての同意を得たうえで、現地での

アレンジメントは私が担う形でスタートしました。

ボストン美術館のコレクションである江戸初期の『洛中洛外図屏風』には長刀鉾も描かれています。それを展示して頂き、屏風と伝統音楽のつながりを示すことで、私たちがボストンを訪れて演奏することの必要性に説得力を持たせました。

大学生から70代の方まで幅広い年齢層からなる浴衣姿の一行は、総勢19名。ボストンの子どもたちに浴衣を着せ、祇園祭の宵山の日和神楽で奏でられる、子どもにも叩くことができる簡単なお囃子を演奏しました。「チャンチャンチキチキ、チャンチャンチキチキ、チャンチキチン、どっこい」を繰り返すのですが、若者を中心とする約200名もの人々が「どっこい」と声を出し盛り上がっている光景に驚くとともに、感銘を受けたことを覚えています。祇園囃子といえば、風に乗って遠くから聞こえてくるイメージがありますが、「どっこい」と声をそろえる現地の人々はもちろん、囃子方も興奮していて、まさに、文化交流そのものだと感じました。

▶現地でもたいへん話題になったと伺っています。こうした活動を通じて、新たな交流が生まれることはありましたか。

長刀鉾祇園囃子の演奏活動に参加した大学生の一人は、触発されてオーストラリアに留学し、英語力を磨いて、英語の教員になりました。それまで祇園祭に訪れた外国人の方への対応に私が呼ばれていたのですが、今は声がかかりません。彼が流暢な英語で立派に通訳を務めてくれています。

私との出会いをきっかけに、国際交流に携わってくれる若者もいます。約25年前になりますが、私のもとを訪れ、「国内での需要が減る中で、海外に目を向け、畳の可能性をもっと広げたい」と話してくれた畳職人の方もその一人です。「価値観を押し付けるならやめたほうがいい。そうではなく、畳の素材や畳そのものを輝かせるような、日本とは異なる使い方を見つけたいと思うなら、ぜひ行っておいで」と背中を押しました。現在はボストン子ども博物館内に移築された和室の畳の表替などを通じて、畳の魅力を発信しておられます。

京こま職人の方は、姉妹都市提携60周年を記念した「ボストン日本祭り」に出展してくれました。通り過ぎる人がたくさんいる中で、彼の前で立ち止まる人と出会うことが大事。「次は、ボストン子ども博物館でワークショップをしてみたら」という提案をしています。

異文化との出会いを通じて、日本を見る目、 京都を見る目、自らを見る目を養ってほしい。

▶国際交流を継続させていくうえで大切なことは何でしょうか。

私自身が姉妹都市交流を通じて強く実感したことが二つあります。

一つは、自分たちが「見せてはいけない」と思っているバックヤードこそが、異文化の人々にとって興味深いポイントの一つであるということです。以前、会場の事情でバックヤードを隠すことができない状況のもと、「お香の会」を実施したことがありました。壁に向かって準備を始めたのですが、気づけば、後ろに人だかりができていたのです。それは大きな発見でした。それからはあえてバックヤードを見せたり、たとえばお茶を出す際に、その道具や淹れ方の説明を加えたりするようになりました。気づきを

実践することでプログラムが多様になりましたし、一つひとつのプログラムに奥行きが生まれましたね。異文化や異なる価値観に迎合するということではなく、「自分ができることはこれだ」、「自分がやれることはこれしかない」といった「ぶれない自分」を持ちながら、その中で関心を持ってもらえることは喜んでやる。私自身はそのような姿勢で、国際交流に携わっていきたいと考えています。

そしてもう一つは、文化のハードを伝えることは容易ですが、それだけで終わるのではなく、いかにソフトを伝えるかが重要であるということです。私がボストンとの交流に携わるきっかけとなった十種香箱のエピソードは、そのことを示していると言えるでしょう。

また以前、海外の美術館に、所蔵されている明治時代の「香箱」を見せてほしいとお願いしたところ、「ありません」と言われ



「お香の会」お稽古風景

たことがあります。これは実は、日本から「香箱」が持ち帰られた際に「KOBAKO」と記載され、戦後に「KOBAKO」が「小箱」と訳されて、最終的に「インセンスボックス」ではなく、「スモールボックス」となっていたためです。つまり、ハードを伝えることと、それを使いこなすためのソフトを伝えることは全く異なり、ソフトを伝えなければ、間違った使い方をされてしまう可能性があるということ。文化を伝える側がソフトをきちんと伝えるとともに、伝えられる側が、ソフトをきちんと学ぶ覚悟を持つことが肝要だと感じています。

思えば古代より、人間の営みはその連続です。英語も同じ。ホテルでチェックインする時、現地の人は「Excuse me」ではなく「Hi」を使います。そしてそう変えるだけで、楽しい会話が生まれます。大切なのは、単語を覚えることではなく、それらをいかに使いこなすかということなんですよ。文化交流においても、それは変わらないのではないかと考えています。

▶国際交流の意義については、どのように考えておられますか。

私は若い時から、異文化との出会いを楽しんできました。その中で感じているのは、国際交流、すなわち異文化に出会うということは、日本を見る目、京都を見る目、自分自身を見る目を養うことにつながるということです。全く違う角度から自分自身をポインティングしてくれるような「もの」「こと」「ひと」に出会うこと、つまり、非日常の中で自分を見つめ、新たな視点を見つけることは、私にとってとても楽しいことだし、嬉しいことでもあるし、視野を広げていくために大事なことだと思っています。

特別インタビュー

02

牧野 直史 氏

日本貿易振興機構(ジェトロ)
京都貿易情報センター 所長



ライフサイエンス分野におけるエコシステムの構築に向けて、京都と世界をつなぐ架け橋に

進化し続ける「HVC KYOTO」を通して ボストンとの双方向の交流を推進

▶ライフサイエンス分野における京都とボストンの近年の交流 状況をお聞かせください。

日本貿易振興機構(ジェトロ)では、国内外のネットワークを生かし、日本と海外を結びつけることで、海外とのビジネスを促進することを目的に活動を行っています。その国内事務所の一つである京都貿易情報センター(ジェトロ京都)においては、2015年1月の設立以来、最も重要なテーマの一つとして、京都の姉妹都市であるボストン市との、ライフサイエンス分野における交流に取り組んできました。[地域間交流支援(RIT)事業および地域貢献プロジェクト]

毎年、地道に行き来して、フェイス・トゥ・フェイスの交流を続けてきました。2019年4月には京都市代表团とともにボストンを訪問し、ボストン市主催の「ライフサイエンス フォーラム」に参加しています。そうした地道な行き来を経て、ようやく双方向の交流の形が見えてきたと感じることができたのが、同年7月の「HVC KYOTO(ヘルスケア・ベンチャー・カンファレンス・京都)」です。

▶2016年よりスタートされたものですね。

「HVC KYOTO」は、ヘルスケア分野で革新的な技術を持つベンチャー企業のグローバルな事業展開をサポートする英語ピッチ(短いプレゼンテーション)イベントです。分野を特定し、英語のみでピッチを行うというイベントは日本では多くなく、スタート時のピッチはわずか2社だったのですが、2019年は、国内外のヘルスケアベンチャー(起業を目指す研究者含む)約30名が登壇しています。またパートナー企業として14社が参画くださり、日本のスタートアップにとってはもちろん、海外のスタートアップにとっても良いショーケースとなるイベントへと進化し続けているという自負があります。

特筆すべきは世界的なヘルスケア産業のエコシステムが形成されているボストンからも毎年参加してもらっており、2019年には、ボストン市より、日本でのビジネスを希望するスタートアップ・ベ

ンチャーなど11社を招聘したことです。ピッチをしてもらったほか、その後、個別商談会をきっかけに京都の企業との具体的なビジネスの話も進みつつあり、ジェトロ京都がフォローアップしています。

▶あれだけの規模のものはあまり見られません。 英語によるピッチも見事でした。

「HVC KYOTO」は、日本のスタートアップが海外に出ていくためのトレーニングの場としても位置づけており、事前にピッチの練習を行っています。いかに差別化するのかという点に加えて、その段階で何を求めているのかをポイントとして挙げる必要性を強調して伝えるようにしています。また大学などの研究者の方が起業するケースでは、学会における発表と投資家に向けたプレゼンテーションとの違いをご理解頂いた上で、いかに相手に訴えかける言葉を選ぶのかという点についてもイベントの提唱者である小柳先生をはじめメンターから助言させて頂いています。今後より多くのスタートアップにとって、「HVC KYOTO」がボストンへ、世界へと羽ばたいていく足掛かりとなるよう、努めていきたいと思っています。

ボストンとの共通点が多い京都が秘める イノベーション・エコシステムの実現可能性

▶ボストンのエコシステムは世界をリードする存在として知ら れます。どのような点が優れているのでしょうか。

ボストン周辺地域ではライフサイエンス等のベンチャー企業が次々と誕生し、イノベーションが連続的に起こっています。このようなイノベーション・エコシステムを形成するポイントの一つとしてよく言われているのは、世界的に有名な大学や研究機関が集積しており、優秀な人材が多いということです。また、大学の研究に裏打ちされた技術を持っている企業が多く、技術系のスタートアップ、いわゆるディープテックのスタートアップが多く見られることも特徴です。それらによって、アメリカの他の地域とは一線を画す、特にライフサイエンス分野において独自のエコシステムを形成するに至ったと考えています。

その形成のプロセスにおいて大きな役割を果たしているのが、

自治体です。ボストン市はイノベーション地区を設け、そこに集中的に研究開発機関やイノベーション・エコシステムのプレイヤーを誘致してきた実績があります。予算を含め、自治体が積極的にコミットメントしているのです。

▶京都市においても、ボストンのようなエコシステムを構築することは可能でしょうか。

京都市とボストン市には、いくつかの共通点があります。まずはボストンと同様に、大学が集積していること。エコシステムの構築には、投資を呼び込むシード、いわゆる起業の種があるということが極めて重要です。

また京都は、日本で初めてベンチャーキャピタル(ベンチャー企業等に投資を行う会社)が誕生した地でもあるのですが、そうした歴史があることに加えて、最近では、大学や企業が独自にベンチャーキャピタルを立ち上げる動きが見られるようになりました。大企業が他社とコラボレーションをする際、これまでは共同研究という形がとられていましたが、その企業自体がコーポレートベンチャーキャピタルと呼ばれるものを設立し出資するなど、さまざまな形でオープンイノベーションに取り組む動きが積極的になってきています。こうした動きも背景に、京都だけではなく全国的に、スタートアップに資金を回そうという気運が高まりつつあるように思います。そうした流れの中で、シードの豊富な京都への投資が加速していくのではないかと期待していますし、ショーケースとして機能し始めている「HVC KYOTO」も、その一端を担っていきたいという思いがあります。

さらに、京都市をはじめとする自治体も、イノベーション・エコシステム(生態系)の構築に対して積極的です。今後、行政がより緊密に関わっていくことで、ボストンのようなエコシステムを形成できるのではないかと期待しています。



Biolabs社との協力覚書締結を契機に ボストンとのネットワークの強化を目指す

▶2019年10月、ライフサイエンス分野をはじめとする交流促進の取組の一環として、ボストン市のBiolabs社と(公財)京都高度技術研究所、京都市が協力覚書を締結しました。今後、どのような連携を期待されますか。

Biolabs社は、シェアラボと呼ばれるラボの共有スペースにスタートアップを入居させ、ビジネスモデル構築などの指導、投資家の紹介、研究支援などを行うことにより成長させるインキュベーションプログラムを展開しています。ボストンのライフサイエンス分野で成功しているスタートアップの多くがBiolabs社のプログラムを活用しており、Biolabs社は、ボストンのエコシステムの核となるプレイヤーの一つと言えるでしょう。

そのBiolabs社のネットワークが、「HVC KYOTO」を足掛かりにボストン、世界へと展開していく形を確立する上で、重要な位置づけにあることはいうまでもありません。そこでBiolabs社には毎年、「HVC KYOTO」に参加して頂いていた。Biolabs社

と京都のプレイヤーを結びつけることにより、京都にその起業支援のノウハウとネットワークを導入したい。また将来的には、Biolabs社の京都進出を実現させたい。そうした思いを抱いてきたこともあり、今回の協力覚書の締結は、その一つのステップになったと感じています。

▶京都におけるエコシステム構築の第一歩ということですね。

エコシステムの構築においては、ハードも重要ですが、ソフト、つまりネットワークが極めて重要です。Biolabs社とは現在、それぞれの持つネットワークを共有していこうという話をしています。まずは、京都のスタートアップや企業がボストンにおいて現地企業との交流を図ったり、あるいは、ボストンやBiolabs社との関わりがあるスタートアップが京都において企業との交流を図ったりと、双方向のネットワークを活かした交流の発展、新たなビジネスの創出に尽力したいと考えていますが、この協力覚書によって、それらがよりスムーズに推進できるようになると期待しています。

“オール京都”のグローバルな発信力で 世界に伍するエコシステム拠点都市へ

▶京都では2019年12月、「スタートアップ・エコシステム拠点都市」の指定を目指す組織が設立されました。

その展望を、どのようにお考えでしょうか。

スタートアップ・エコシステムの形成においては、さまざまなプレイヤーの間の結びつきが不可欠です。その促進という観点から、京都市、京都府、京都商工会議所をはじめ、大学や金融機関なども含む京都の産官学約30の団体が構成される、まさに“オール京都”の「京都スタートアップ・エコシステム推進協議会」は、重要な役割を担うこととなるでしょう。前述の通り、企業においてオープンイノベーションに取り組む動きが見られる中で、この協議会を核として、産業界における企業レベルでの連携も広がっていくことを期待しています。

▶現在、全国各地で自治体によるイニシアチブの下、少しずつエコシステムが形成される動きが見られており、内閣府の構想は世界に伍するスタートアップ・エコシステムを構築することを目的としています。

ポイントとなるのは、その都市が、いかにグローバルなつながりを有しているのかということです。その点、ボストンと60年にもわたる交流の歴史を持ち、外国人観光客が急速に増えている昨今、世界的な知名度を誇る京都のポテンシャルの高さは計り知れません。そうした強みを最大限に活かしていくためにも、世界に向けて“オール京都”で、京都を「スタートアップの街」としてアピールして頂きたいと思います。その実践により、世界と京都におけるビジネスとのつながりはますます揺るぎないものになっていくことでしょう。グローバルな高齢化の進展のもと、日本は課題先進国でもあり、ヘルスケアは有力な分野です。そこで、京都でヘルスケア・ライフサイエンス分野のエコシステムを構築することは、最も重要なミッションの一つといえます。ジェトロ京都がボストンとの交流を通じて築いてきた双方向のネットワークのさらなる発展と、世界に約80の拠点を持つジェトロのネットワークの活用をもって、京都が世界に名を馳せるスタートアップ拠点となる一助を担いたいと考えています。

特別インタビュー

03

岸田 蘭子 氏
京都市立高倉小学校 校長



次代を担う子どもたちに、国際交流という 扉を開く鍵を持たせることが、教育者としての使命

「青い目の人形」メリーちゃん存在が、
ボストンと高倉小学校との架け橋に

▶高倉小学校では積極的に国際交流を進めておられます。ボストンとの交流は、どのようにスタートしたのでしょうか。

きっかけとなったのは、本校で保管してきた「青い目の人形」でした。「青い目の人形」とは、日米間の親善を目的としてアメリカから贈られた人形の通称です。1927年、日米の対立を懸念したアメリカ人宣教師のシドニー・ギューリック博士が、「世界の平和は子どもから」というスローガンとともに、人形を通じての親善活動を提唱したことに端を発します。その考えに共感した日本財界の重鎮・渋沢栄一が仲介を担い、全米より集められた12,739体の「青い目の人形」が、日本各地の幼稚園・小学校に配られました。また翌年、日本から答礼人形としてアメリカに贈られた「ミス大日本」のほか、「ミス京都」など主要都市の名を冠した市松人形は、各州の博物館や美術館などの公共施設に届けられています。

「青い目の人形」は戦争を経て、そのほとんどが行方不明となってしまいました。本校にある青い目の人形・メリーちゃんは、現存する貴重な一体です。もともとは旧京都市立本能小学校で保管されていたもので、小学校統廃合に伴い本校へとやってきました。

▶校長室前の飾り棚に、大切に保管されていますね。

約3年前、ギューリック博士のお孫さんにあたるギューリック3世ご夫妻が、メリーちゃんに会うために来校されました。彼は、このように今も「青い目の人形」が大切にされていることに感銘を受け、祖父の意志を引き継ぎ、人形交流を再開させることを決心されます。2018年、本校に「新・青い目の人形」として、マンディとマイケルが贈られました。

そして大きな鍵となったのが、その後の、ボストン子ども博物館の茶山明美さん(P.56)との出会いです。彼女は、約40年前に京都から同博物館に移築された町家に関する取材を目的とされていたのですが、話をする中で、なんと、日本からの答礼人形の一つ「ミス京都」が同博物館にいたことが分かったのです。

私はギューリック3世が最初に本校にいらっしゃった時から、「青い目の人形」にまつわるストーリーを形にして残さなければならないという思いが高まるとともに、「青い目の人形」を教育財産として活かすことで、子どもたちの心にメリーちゃんを息づかせたいと考えていました。茶山さんを通じてボストンと本校のつながりを知り、本校から提案したのが、後にボストン子ども博物館との共同プロジェクトとして実施することとなった、6年生の子どもたちによる日本文化紹介DVDの作成です。ボストン子どもミュージアムのスタッフが作ってくれたビデオレターをお手本にしながら、「This is my lunch!」と給食を紹介したり、和室で置やお茶を紹介したりと、分担して作り上げました。

▶内容を拝見しましたが、とても完成度の高いDVDでした。その教育的意義をどのように感じていらっしゃいますか。

学習においては、「何のために学ぶのか」という目的意識を持たせることが大切です。DVDを作るという目標ができたことで、英語を一生懸命勉強していましたし、ボストンと本校をつないでくれた「青い目の人形」や「ミス京都」についても興味を持ち、DVDを作成する意図を理解した上で取り組んでくれました。同博物館の町家コーナーの座敷に置かれたテレビで流されていて、ボストンの子どもたちが実際に観てくれていると聞いてとても喜んでいましたし、何より、そうした話から、「自分たちの英語でも通じるんだ」、「こうやって海外の人と繋がることができるんだ」という実感を得られたことが大きかったと思います。その後も、同博物館で開催されるうちわ制作ワークショップに合わせて、本校の子どもたちが作った祇園祭をモチーフにしたうちわを送って展示してもらうなど、交流が続いています。

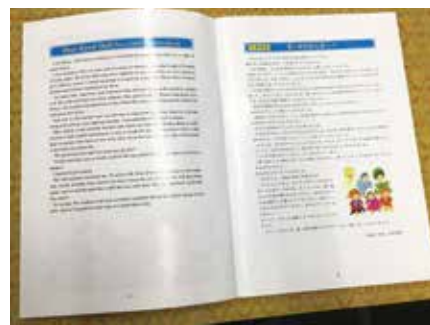
青い目の人形を題材とした
学校オリジナルの道德教育を展開

▶高倉小学校では、道德教育においても、メリーちゃんを活かされていると伺いました。
新学習指導要領では、特別の教科「道德」として実施し、その

中で、これまでは高学年のみを対象としていた「国際理解・国際親善」の内容を、低・中学年でも扱うことになりました。前述の通り、「青い目の人形」にまつわるストーリーを形にして残したいとの思いもあったので、子どもたちにとって身近な存在である「青い目の人形」を題材とした独自の教材を作ろうということになったのです。今から3年前に、まずは日本語版を完成させました。低学年用は人形自身が語っているような文章になっています。中学年用は本校の生徒が主役のお話に、高学年用は客観的に経緯を理解するとともに、ギューリック博士や渋沢栄一氏を例に国際交流の架け橋となって活躍する人々のことを知る内容に仕上げました。

▶日本語と英語でとてもわかりやすくまとめられています。

メリーちゃんのストーリーを、京都とボストンの子どもたちが共有できるようにしたいと考えたからです。日本語版ができあがった頃、ボストン大学で日本文学を研究されているフレデリック・サラ先生が京都に留学されていて、本校にご子息が通われていました。そのご縁から、英訳して頂けるようお願いしたんです。「そんな大事な仕事を任せてくれてありがとう」と快諾してくださり、新たに生まれたエピソードも加えたものが、2019年の夏にできあがりました。2か国版は、ボストン子ども博物館はもちろん、ボストン日本協会を通してボストンの学校にもプレゼントしてもらえないかという提案をさせてもらっています。



「青い目の人形米国里帰りプロジェクト」を通して
気づかされた、次代にふさわしい国際交流のあり方

▶そして2019年4月、姉妹都市提携60周年を契機として、『「青い目の人形」米国里帰りプロジェクト』を実施することになりました。

実はギューリック3世ご夫妻が来校された際、学校運営協議会の会長と、「いつかはメリーちゃんたちをアメリカに里帰りさせてあげたい」という話をしていたのです。その後、同博物館に「ミス京都」がいることもわかりました。そうした中、2019年に京都・ボストン姉妹都市提携60周年を迎えることを知って、「このタイミングしかない」と思ったのです。学校運営協議会を母体としてプロジェクトチームを組み、京都市代表团とともにボストンを訪問することになりました。

▶友情人形同士の対面セレモニーでは、どのような思いを抱かれましたか。

子ども博物館から思いがけないサプライズがありました。茶色い目のアフリカ系アメリカ人の黒人の女の子、メロディをプレゼントされたのです。メロディには、『「青い目の人形」がオール・オブ・アメリカではないことを知ってほしい。そしてメリーだけではなく、

メロディとも仲良くしてほしい」というメッセージが込められています。この人形を私たちに託したいというボストンの方々の思いに触れ、「そうだったのか」と衝撃を受けました。「多様性を受け入れ共存する多文化共生社会を目指すことこそが、これからの時代にふさわしい国際交流のあり方であり、次代を担う子どもたちへのメッセージなのだ」と気付かされたのです。このことを一日も早く子どもたちに伝えたいと思いながら、帰国しました。

▶そのメッセージを、子どもたちは感じ取ってくれていると思います。その半年後、ボストン市代表团が高倉小学校を訪れた際も、仲良く過ごしていると伝えてくれましたよね。

こちらが思っている以上に、子どもたちは理解してくれていると感じます。5月の朝会では憲法月間ということもあり、両国ともに辛い歴史があることや、日本に全ての人が幸せに暮らす権利があると定めた日本国憲法があるように、アメリカには人種差別を禁じる法律があること、だからこそメロディをプレゼントしてくれたことを話しました。すると、子どもたちの胸にすんと落ちたんです。学校に来た母親を子どもが柵の前に連れてきて説明する姿が見られたり、1年生の学校探検の時に、2年生は「大事にしないといけない人形だ」と上手に説明したりしています。また令和の新紙幣が発表された時には、6年生が「ニュースでやってた渋沢栄一さんって、『青い目の人形』の人でしょ」と言っていたと聞いて驚きました。

▶子どもたちにとっては、「青い目の人形」の父なんですね。

そうなんです。さらに、10月のボストン市代表团訪問の際には2年生の生徒が中心となって出迎えてくれたんですが、テレビ局の方からのインタビューに対して、まだ2年生の生徒が、「お人形のことは、私たちが大きくなってからも、次の世代の子どもたちにちゃんと伝えなければいけないと思った」と話してくれていました。単にお人形を大切にするのではなく、このお人形にまつわるストーリーを伝えていかなければいけないということを、ちゃんと理解してくれてるんですね。やってきてよかったと、心からうれしく思いました。

可能性を広げ、進化し続ける国際交流を
創造する力を育んでいきたい

▶お話を伺って、国際交流の意義を考える上での大きなヒントを得ることができました。

私自身、「青い目の人形」のストーリーの中で海外との交流に携わり、多くのことを学びました。海外旅行と、自分を待っていてくれる人に会うための海外訪問とは、学びや成長の「密度」が違います。だからこそ子どもたちには、英語の勉強をするだけでなく、勇気を持って、臆することなく日本を飛び出し、海外の人々とつながってほしいと思います。そしてぜひ、世界中の人と渡り合えるような精神力や、進化し続ける国際交流を創造する力を身につけてほしいですね。

私の使命は、子どもたちが将来、「こんな国に行ってみたい」、「海外でこんなことができたらいいな」といった思いを抱くことができるような素地を作ることだと考えています。いわば、海外への扉を開く鍵。多くの生徒たちがその鍵を使って、その扉を開けてくれることを願っています。

特別インタビュー

04

森田 喜代子 氏

ボストン日本協会 理事



森田理事(右)と夫のマイクさん(左)

～結～苦勞を乗り越えた先にある大きな国際交流の喜びと そこから生まれる人と人の繋がり

長年にわたり京都ファン・日本ファンを 生み出してきたボストン日本協会

▶森田理事がボストンに住むことになったきっかけを教えてください。

1985年の夏にハーバード大学のサマースクールで日本語を教える機会を得たことがきっかけです。その後も秋学期から日本語講師として招聘され5年間勤めました。ハーバード大学以外でも日本語講師として働き、一番長く在籍していたのはタフツ大学でした。タフツ大学には、1993年から2016年まで日本語名誉講師として退職するまで勤務しました。アメリカ人の夫と結婚して、ボストン郊外にあるニューダムに住んでおり、現在、ボストン日本協会の理事を務めています。

▶ボストン日本協会とはどのような組織ですか。

ボストン日本協会は、米国と日本との懸け橋になっているNPOの一つです。1904年に設立された米国にある40以上の日米協会の中で最も古い歴史ある協会でもあります。会員の方のほとんどがアメリカ人であり、ビジネスマン、学生、学者、一般の知日家、日本が大好きな人たちが集まっています。主な活動内容として、ビジネスプログラム、文化紹介プログラム、教育(日本語コース)、コミュニティーへの貢献などを通して日本を紹介しています。これらのプログラムは基本的には英語で行っています。

私は今年2月から再開する日本語コースの教師の人選とカリキュラムなどのアドバイス役を務めるとともに、毎年恒例となっている協会主催のガラディナーの準備も進めています。

▶森田理事が日本協会に入ることになったきっかけや、普段の活動内容をお聞かせください。

私が会員になった経緯を簡単に説明しますと、インディアナ大学で「香道と文学」という修士論文を作成したことがあるのですが、それを読んだ故ラッド・スミス氏(ボストン日本協会会員)から、所有する香道具の使い方について相談がありました。そんな時にちょうど松栄堂社長の畑さん(当時は専務でした)(P.48)がボス

トンにお越しになる機会があったので、畑さんに協力頂き、私がボストン側の窓口となってお香の会を企画しました。以来、私も自然な流れで協会の会員となりました。畑さんには、2001年の9.11アメリカ同時多発テロの年以外、毎年欠かさずボストンにお越し頂いており、長い付き合いが続いています。これまで協会や私の持つネットワークを使ってアメリカの30校くらいでお



お香の会の様子

香のレクチャーを行ってきました。今ではお香の会は協会を代表するプログラムであり、ありがたいことに畑さんには無料奉仕でボストンまでお越し頂いています。

2016年にタフツ大学を退職した後は、協会会長のビル・ハント氏から理事就任の依頼を受けました(理事と言っても、毎年NPOである協会を支援するための寄付金を納め、無休・無給の全くのボランティアですが)。退職して比較的時間に余裕があり、京都をよく知っている人間ということで、京都・ボストン姉妹都市提携60周年記念事業の架け橋役をすることになりました。畑さんを通して、作家集団「工芸京都」のボストンでの展示企画の相談も受けておりましたので、理事就任も自然な流れでそうなっていました。

▶京都市代表团がボストンを訪問した際にも、ボストンにはたくさん京都ファンがいらっしゃることに感銘しましたが、ボストンの方々は京都にどのようなイメージをお持ちですか。

学生、一般市民を問わず、日本と言えば京都が一番好きだと思います。大学生の日本語研修プログラムにも「Kyoto Center of Japanese Studies」というプログラムがあります。ボストンには100校以上もの大学があり、日本

語が学べる大学や高校も少なくありません。日本語を学習した学生であれば、京都関連プログラムを希望します。京都の食文化、伝統文化、祭りなどに関心が高く、そして、お寺、神社、庭などにも日本人以上に興味を持っている人がたくさんいます。モダンなイメージの東京や大阪に比べて、古き良き美しい日本を経験したければやはり京都に行かなくては、という考えを持っていますね。

両市民が力を合わせることで 多くのプロジェクトを実現 多くの人たちと繋がりを持てたことが 何よりの財産

▶森田理事をはじめ協会の皆様には、ボストンと京都のパイプ役として大きなお力添えを頂きました。今回の60周年記念事業での一番の成果と考えていることは何でしょうか。

長期間に渡って力を注いできたのは、2年半以上かけて実現することができた作家集団「工芸京都」さんのボストンでの展覧会です(2019年9月～11月の期間でSociety of Arts and Craftsで開催)。あれだけ多くの素晴らしい作品がボストンで紹介できたことにはとても大きな意義がありましたね。

そして、ウォルシュ ボストン市長の日本訪問は実現しなかったものの、ボストン市長代理をはじめとするボストン市代表团一行13名の京都訪問が叶ったことも、成果の一つだと思います。メンバーのうち半分近くは京都が初めてだったので京都のことを知る良い機会となりました。また、この時は皇后陛下からボストン日本協会に寄贈頂き、大切に保管されていた日米親善人形の友子(ゆうこ)さんも一緒にお里帰りとして京都を訪問したことも良い思い出です。

一方、ボストンでも門川市長たちに4月にボストンにお越し頂き、多数の両市民の参加のもと、姉妹都市提携の再確認の調印式ができたことも嬉しかったです。「結(むすぶ)」をテーマに開催したボストン日本協会が主催したガラディナーでもたくさんの方に集まって頂きました。京都南ロータリークラブさんによる植樹式も印象深いものでした。これも時間をかけて一緒に準備を重ねて実現できたのですが、ロータリークラブの窓口となってくれた木下哲次さんには大変お世話になりました。木下さんの存在は、私と同様に一人の市民であり、ボランティアである自分の姿とも重なり、大きな励みとなりました。ボストン市代表团が京都を訪問する際の受入れにも多大な御尽力を頂戴しました。



JETプログラム※メンバー同窓会(長刀鉾保存会から頂いたお揃いの浴衣を着て)
※語学指導等を行う外国青年招致事業

▶森田理事にはボストンと京都、両方の記念事業で様々な調整を進めて頂く中でたくさん苦勞もあったかと思いますが、いかがでしょうか。

苦勞話は山ほどあり過ぎて絞りたいところですが…、ボストンでの展覧会場探し、そしてその展覧会のための図録作成は特に印象に残っていますね。幸い今となってはほとんど笑える程度の良い思い出となっていますが。自分にできるだけのことはした、という満足感があります。毎晩のように電話で工芸京都の作家の今井さんや、京都南ロータリークラブの木下さん、京都市の担当者や電話でたくさん話したことを思い出すと、とても懐かしいです。本当に色々なことをやり遂げました。両市の皆さんが協力し、力を合わせることで、事故一つなく、これだけのことが実現できました!

一番嬉しいことは、この60周年記念事業を通じて本当に色々な方々との繋がりができたことです。まだ頭の中ですべてのことを整理しきれておりませんが、今あるのは感謝の気持ちのみですね。

これからも、もっと多くの若者たちに 交流の喜びを感じてほしい

▶今後このような交流を継続させるために必要だと感じていることはありますか。

毎年、同志社小学校や堀川高校の生徒さんたちはボストンを訪問してくれていますし、ハーバード大学の学生さんも京都を訪問しています。もっと交流に広がりが出るようにボストンの公立学校からも日本を訪問するプログラムが作れば良いですね。例えば、エッセイコンテストの優秀者に姉妹都市を訪問する機会を提供するようなプログラムを両市で実現できれば良いと思います。高倉小学校でも日米友情人形の交流を通じた素晴らしい取組をしていますし、もっともっと多くの子どもたちに交流の喜びや大きな発見をしてもらいたいと心から願っています。

交流を継続させていくことは疑う余地がなく重要なことですが、実際にプロジェクトを実現するためには大変なエネルギーが必要となるのも事実です。両国の文化に精通していながらコミュニケーションを取ることができる橋渡し役の存在が重要となりますが、ボランティアとして関わっていくには、時間と経済的な余裕も必要となります。姉妹都市交流は行政だけでできるものではありませんし、多くの人たちに関わってもらわなければなりません。交流の楽しさ、そこから得られる喜びの大きさを広く伝えていくことが大事ではないでしょうか。



日本語・英語でのLanguage Exchangeの様子

特別インタビュー

05

茶山 明美 氏

ボストン子ども博物館
日本プログラム マネージャー
兼エデュケーター



京の町家を通じて、京都とボストンの 姉妹都市のストーリーを末永く共有していきたい。

遊びは最高の学び。物ではなく、
人のためにある場所「ボストン子ども博物館」。

▶ボストン子ども博物館はどのような施設ですか。

当館は、子どもと子どもたちを支援する人々やコミュニティのためのミュージアムで、年間で約55万人のお客様がお越しになっています。

一般的にミュージアムは「物を収集したり、保存したり、研究したり、展示紹介したりする場所」という概念がありますが、当館では「人々のため、コミュニティ作りのためにある場所」というコンセプトを第一にして活動しております。「館内でやっていることが成功しているように見えても、それが当館の壁の外（つまり社会の中）でのコミュニティ作りに繋がってなければ、それは成功ではない。」と考えています。そして、その活動の中心にあるのが『遊び』という人間の基礎にあたるものです。私たちはその力を信じ、日々『遊びと体験と学び』のことを研究しています。当館はそのようなNPO団体です。

▶館内に入ると、子どもたちが館内で生き生きと遊んでいる様子が目に飛び込んできますね。茶山さんが博物館で働くことになったきっかけをお聞かせください。

今から約20年前になりますが、ボストンへ来てまだ間もない頃の私は右も左も分からず、英会話力もあまりなく、不安を感じていました。「どのようにしたらこの街の新しい一員（ニューポストニアン）として生活をする自信を付けていけるだろうか？」そんなことを考えながら、社会に関わる入口となるものを探していました。そんな時に、たまたまボストン子ども博物館にある京町家でのボランティア活動員の募集要項を見つけました。それを見てすぐに応募し、私とこの『京の町家』との関わりが始まりました。



町家前のストリートで獅子舞を披露

ボストンにいながらにして京都・日本文化を
体験できる京町家。

▶普段はどのような活動をされていますか。

私は日本プログラムのマネージャー兼エデュケーターとして、町家にお越しになるお客様たちが、靴を脱ぎ一歩足を踏み入れれば、まるで京都にいるような気持ちになれるよう日々取り組んでいます。ボストンの子どもたちが「私は今日、京都の町家に住む友だちの家に遊びに来ているんだ!」とイメージできるような場所づくりを心がけています。

四季の移り変わりを感じられる日本の行事、例えば、お正月や節分、夏祭りなど子どもたちに楽しんでもらえるプログラムも企画しています。子どもたちの生まれ持った想像力や好奇心にはすごいものがあります。この町家での体験を通じて、子どもたちは自然に京文化・日本文化を身近に感じ、それを吸収して成長していきます。

もちろん、ボストンという日本から遠く離れた環境で用意できることにかなり限りはありますが、畳の上を歩く時、布団に寝転がっている時、床の間の飾りを観賞している時、仏壇の中を覗き込んでいる時、お香の香りに包まれて寛いでいる時、屋根瓦の上の鍾馭（しょうぎ）さんを見上げている時…、子どもたちは脳や心や身体の中にどんどんと何かを学んで吸収しているのです。これらの体験を通じて、自分が持つ文化習慣との違いを感じ、お互いの文化を尊重していくことの大切さを学びます。そして、その体験は健康的な自己アイデンティティを形成する助けにもなります。

この『京の町家』での五感を使った体験型学習では、講義型での勉強とは異なり、子どもたちは目を輝かせます。好奇心を基盤にした学び方なのでプレイフル・ラーニング、パッションベース・ラーニングとも言います。結果的にこの『京の町家』での体験は、子どもたちの記憶にも深く残ることになります。「子どもの頃、この京都から来た町家で遊ぶのが大好きだったの。よく覚えています。」と、自分の子どもの頃を思い出しながら語ってくれる大人のお客様によく遭遇します。その人にとっては、実際の距離は遠い日本の京都でも、ボストンで京文化を身近に感じながら育ったことになります。

私はボストンの子どもたちに、「このおうちはね、京都の人がボストンの人にプレゼントした家だから、ボストンに住んでいる君たちの家なんだよ。」と言ってあげます。それを聞いた子どもは「これは、私たちの家なの!」と、とても嬉しそうな笑顔を見せてくれます。日々そんなやり取りをしながら、この『京の町家』はたくさんの子どもたちから大切に思われているのです。



新しく届いた布団を敷く様子

京の町家には先人の国際交流を通じた
平和への強い思いが込められている。

▶京町家が移築された当時のお話もお聞かせください。

当館にある『京の町家』は、もともと住山さんご一家が京都の西陣で実際に住まれていた本物の町家ですが、京都市とボストン市の文化交流の一環として今から40年前、ボストン子ども博物館のリニューアルに合わせて京都から移築されました。

実は2018年2月、この『京の町家』にとって大切な人を失ってしまいました。当館の名誉理事である織田 頼（おだ より）先生がお亡くなりになったのです。織田先生は長年ハーバード大学で教鞭に立ちながら、この『京の町家』のために多大な貢献をされました。

1976年に京都市からボストン市に町家を寄贈しようという申し出を頂いた際に、通訳をされていたのが織田先生でした。通訳をする時には、京都市の方々の発言内容に「それは本気ですか。ただの社交辞令ではないですか。」とはっきりと確認できるまで通訳をしなかったそうです。それは単に言葉を翻訳するだけでなく、「異なる文化の間で互いが本当に理解して、絆ができるように」という思いからでした。いつも人と人、文化と文化、その架け橋の役目を考えているような方でしたね。

織田先生のエピソードをもう一つ。1979年に町家の移築事業で京都から宮大工さんたちがお越しになっていた時、大工さんたちは慣れない生活環境で受入れ体制も十分に整っていないこともあり、苦労されたようです。「大変な時に織田さんがおにぎりとかの差し入れを持ってきてくれてね。嬉しかったな。」と大工さんが当時の思い出を私に語ってくださったこともありました。

80年代に入り、当時の館長マイケル・スボックから織田先生に当館の役員になって欲しいと申し出があったそうです。役員とはお金持ちで影響力のある人がなるものだと考えていたそうですが、織田先生は「この町家を大切に思う気持ち、そのパッションだけは誰よりも大きい」と思い、その役目を引き受けたそうです。それからは当館の役員として、日本とボストンを行き来しながらこの『京の町家』のための活動資金集めに努めてくださいました。その努力の結果にできたのが「サダノブ・オダ基金」です。織田先生のお父様の後輩の方々がこの活動のために応援に立ち上がってくださったので、基金名はお父様のお名前を付けたそうです。

織田先生はお亡くなりになる2~3か月前にも、京都を訪れて「京の町家」のための活動をされました。戦後間もない広島の様子をご自身の目で見ただからこそ、国を超えて互いを理解し、尊重する心の大切さを感じておられました。「ボストンの人々、特に子どもたちが京の町家を通じて、日本のことを学んでくれること

が、より良い未来に繋がっていく。」と私に話してくださったことを覚えています。

記念事業をともに作り上げたプロセスにこそ
大きな価値がある。

▶今回の60周年記念事業での一番の成果と考えていることは何でしょうか。また、苦労話をお聞かせください。

この60周年のお祝いを通して、本当にたくさんの方たちにこの『京の町家』の素晴らしさを知って頂くと同時に、当館が更に人々が集まる場になりました。人から人へ、文化から文化へ、その架け橋を、京都市の担当者や、多くの京都市民の方々と一緒に計画し、準備し、作り上げられたことが何よりの成果だと思います。結果以上にそのプロセス自体に価値があり、今回の交流が将来へと繋がっていくことを信じています。

苦労話は、過ぎてしまえばなんとかと言いますが…、なぜかもう何も浮かびませんね。あえて言うとなれば、準備を何度重ねても、予定通りには行かなかったことでしょうか。特に当館のような環境（子どもたちが安心して遊んで学びを体験できる場所）では、計画通りにいかないことは当たり前で、それがあ意味この現場の面白いところでもあります。その中で臨機応変に対応していくことは、その様子を見ている子どもたちにとっても、挑戦する勇氣や上手いかわい時の順応力の大切さを実際に紹介する場にもなると思っています。そうして、生きる力（レジリエンシー）を身に付けていってくれるだろうと信じています。（とは言いながらも、想定通りに行かないときにはやはり冷や汗をかいておりますが）。

『京の町家』のこと、
京都でもっと広く知ってほしい。

▶これからも両市が息の長い交流を続けていくために大切だと
考えていることをお聞かせください。

今後もお互いのストーリー共有をしていくこと、そして、文化と文化を繋ぎながら、コミュニティ形成の活動をしていくこと。そのうえで、いつでも楽しめるコ・クリエーション（共創）的な企画を作っていくことだと思います。

▶本当に、京都・ボストンが姉妹都市だからこそ積み重ねること
ができた交流がたくさんありますね。最後に、京都の子どもたちにも一言お願いいたします。

ボストン市の人々から大切にされている『京の町家』、京都市の皆さんはご存知でしょうか。この町家のおかげで、ボストン市の子どもたちはアメリカにいても、まるで京都にいるような気持ちになれます。それってすごいと思いませんか。そのような体験から、ボストン市の子どもたちは自然に京都市の皆さんのことを、より一層身近に感じながら育つことができます。ボストンにある『京の町家』はそんな素敵な場所なのです。是非、そのことを知ってください。そして、このことを周りの方にも伝えてください。そして、いつかこの場所に遊びに来てくれたら幸いです。

京都から遠く離れたボストンでもう40年近く活躍しているこの町家も、故郷の京都のことを今でも大切に思っていることでしょう。京都の方々がお越しになれば、きっと町家も嬉しさに違いありません。皆様を心からお待ちしております。

編集後記（担当者のつぶやき）

ボストン市との姉妹都市交流が始まった1959年から間もない頃は、まだ日本では海外旅行が高嶺の花と言われていた時代でした。海外旅行の自由化が始まったのが1964年で当時の出国日本人数は約22万人。それから50年以上が経過した2018年には1,895万人にまでその数は大幅に増加しています（「JNTO日本政府観光局」調べ）。当時は来日する外国人の数もずっと少なかったので、この「人の往来」というデータだけを見ても、昔と今では大きく状況が変わったことが窺えます。また、当時はインターネットという便利なツールもちろんなく、ボストンのみならず、日本と海外の間での連絡・調整を進める苦労は相当なものだったと想像します。それだけに、当時の文献を調べていると、携わっていた先人の方々の姉妹都市交流にかける強い思いや海外への高い好奇心が大きな熱として伝わってきます。

今から振り返ること2018年、担当者として翌年に控えた60周年記念事業を本格的に進めていくにあたり、その中身を意義あるものにするためには、まず京都・ボストンの間でどのような交流の積み重ねがあったのか、それをしっかり知ることから始める必要があると考えました。過去、多岐にわたる様々な交流がありましたが、その中で最も象徴的な存在がボストン子ども博物館にある京町家でした。ありがたいことに、この京都市が寄贈した京町家では日常的に京都や日本の文化を体験する機会が子ども達に提供されています。同館で働く茶山さんに記念ロゴマークの作成を依頼すると、快く引き受けて頂き、この素晴らしいロゴマークが生まれました。また、そのデザインには「選暦（＝新しく生まれ変わる）」という重要なメッセージも込められていました。

今回の記念事業で特徴的だったことは、これまでの文化、教育、スポーツ等の交流分野が更に深められるとともに、新たに経済分野や環境分野へと交流の幅が広がったことです。同時に、この記念事業を契機に今回初めてボストンとの交流に加わってもらった多くの方々がおられます。両市民皆様のお力により、現代にあわせた形で、両市にとって未来志向の交流を深めることができました。

私自身、この交流を通じて普通の海外旅行ではなかなか味わえないような多様な価値観に触れるとともに、言葉や文化の壁を乗り越えて事業と一緒にできた達成感を得ることもできました。そして、ボストンという町が漠然としたイメージから、そこで暮らす親しい人たちの顔の見える場所になったのです。この記念冊子を通じて、「国際交流の意義」について触れている多くのヒントを、少しでも多くの方に感じてもらえれば幸いです。

最後に、紙面の都合上全員のお名前を掲載することができませんでしたが、この度の記念事業、そしてこれまで交流に携わって頂いたすべての皆様に心から感謝申し上げます。

長年にわたる姉妹都市交流は、リレーのバトンパスに似ています。先人達が繋いでくれたこのバトンがこれからも長く将来へと受け継がれていくことを願っています。

京都・ボストン姉妹都市提携60周年記念事業実行委員会

委員長 山口 ひかり（京都市総合企画局国際化推進室 室長）

副委員長 畑 正高（松栄堂 代表取締役社長／京都日米協会 副会長）

委員 森田 喜代子（ボストン日本協会 理事）

委員 石原 賢一（日本貿易振興機構京都貿易情報センター 前所長）
牧野 直史（同上 現所長）

委員 小田 佳美（京都市総合企画局国際化推進室 副室長）

委員兼会計 西邑 昭裕（京都市国際交流協会 事務局次長）

〈敬称略〉

（2020年2月発行）

